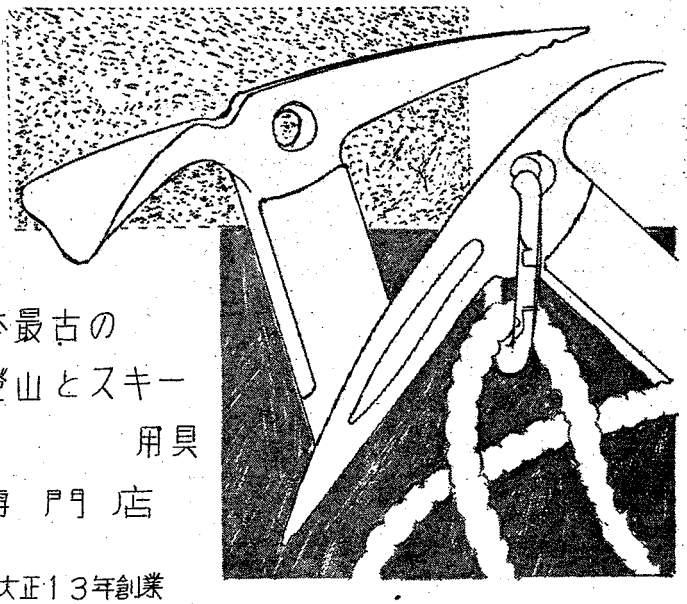
時報 No.8.

1957.10

大阪大学山岳会



日本最古の
登山とスキー
用具
専門店

大正13年創業

大阪・東京・神戸・福岡

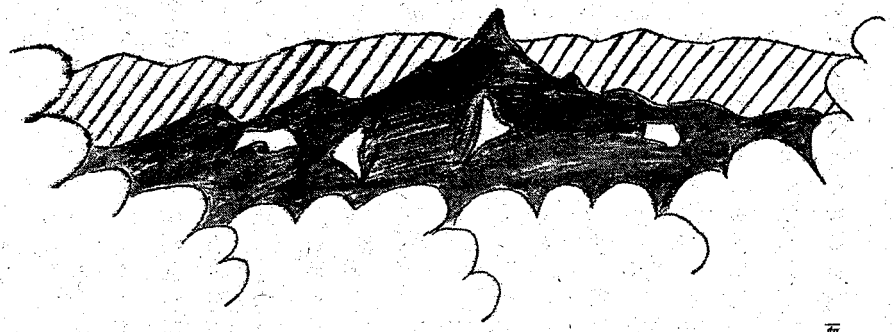
好日山荘

エドワール・フレンド（シャモニー）日本総代理店

札幌・門田作・関西総代理店

大阪・北区 堂ビル前 協和銀行ビル3階

TEL ㉞.7745.



頁

○これからのザイル …… 篠田軍治 2

○縁の下の力持 …… 田島 汎 3

○合宿報告

1955年度 …… 5

1956年度 …… 42

○マナスル通信 …… 徳永篤司 63

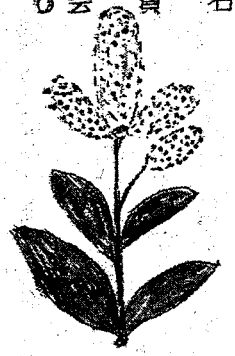
—サマ・ベースキャンプにて—

○山行記録

1955年8月～1957年3月 …… 68

○編集後記 …… 81

○会員名簿 …… 82



（目次）

時報 第8号

これからのザイル

篠田軍治

登山者はザイルを技術的に見るとタブーともいうべき無理な使い方を無関心に行っている場合が多い。墜落をザイルでとめようとするのは少々虫の好過ぎる注文であるが、それにしても今までのマニラは衝撃には脆過ぎる。これは昔からわかつていたことではあるが、綱を太くすれば登山用としての價値が無くなるので、今の太さに落ちついたものと思われるが、この欠点はナイロンの出現によつて大いに改善された。しかし、ナイロンとても欠点がないわけでもない。これについては昨年の阪大工学部報告に述べてあるのでこゝにはふれない。ナイロンよりもテリレンの方が優秀な性質をもつている。そこで、昨年、南極観測用にテリレンのザイルを試作して、一部は阪大の今年の春山にも使つたが、衝撃に対する性能は決してナイロンに優るとは云えない。しかし、濡れても強度が落ちないとか、ナイロンよりもさばき易いことなどは確かに優れている。しかし、合成繊維にはどうしても避けられない欠点がある。そこで、これからは金属のワイヤロープが登山用として注目されるものではなかろうか。もちろん今までのザイルを全面的に置き換えることはあり得ないが、特殊な目的、例えば、渡渉とかトラバースなどには確かに応用面があるのではなかろうか。この次のステンレス鋼線は平方粍当り二〇〇キロ以上の強度のものが珍らしくないので軽量で可撓性をもつたワイヤロープも可能である。

合成繊維の方もテリレンよりも優れたものが既に出来ているようである。このようにしてザイルも益々優れたものが現われるであろうが、ザイルは飽くまでも登攀の補助具である。それ以上を期待するのは無理であることを忘れてはならない。

縁の下の力持

――特にリーダーの諸君に――

田島　汎

〝投手の成績の半分は捕手の成績である〟野球評論家はよくこんな事を言う。成程、捕手の好リードあつてこそ投手はいいピッチングが出来るわけだが、しかし、記録欄に現われる成績は飽く迄投手のものであり、捕手のものではない。つまり捕手は投手の縁の下の力持というわけである。縁の下には土台石があつてガッチリと柱を支えているが投手が野球チームの柱であるならば捕手はさしづめ土台石という所であろう。

所で〝山登り〟というスポーツは全ての下界のスポーツと事変り、朝起きてから夜寝る迄、一日の生活の全てがそのプレイの対象であるから、その運営は極めて複雑であり、従つて記録面には何も現われない仕事をコツコツとやつていく人――即ち縁の下の力持は特に必要である。山へ行く迄に下界でやらなければならない厄介な仕事の数々、或は登攀をスムーズに行う為に麓の方で次々と片付けていかねばならない細々とした段取り等〝縁の下の力持〟達のやるべき事は非常に多いし、又それをコナしていく人達があつてこそ山登りが出来るというものである。

今年、マナルスの登攀隊に参加し種々と貴重な体験を積んで帰られた穂永先輩の土産話に〝ナイケ・コルに山の様に積み上げられた諸物資を整理配分し、各キャンプへの荷上の段取りを、それこそ不眠不休でやり続けたM隊員なくして今回の成功はあり得なかつた〟と、洩らしておられたが、それでいて輝かしい登頂や怖ろしい雪崩の記事にかくれてこのM隊員の仕事などは一言半句も新聞には載らなかつた。こういうM隊員などは全く縁の下の力持中の力持で、頭の下る思いである。

所で話は変るが、阪大山岳会にはいつの頃か

らかリーダー会というものがある。上級部員の中経験技倆共優れた者によって構成されていることはその性格がチープリーダーのスタッフであるという点迄同様、恐らく他にもその例は見られるだろうが、阪大のリーダー会は他の同様の組織と矢張り何か異った一脈の血を持っていることは確かだ。

阪大山岳会が段々と成長しつゝあった頃、丁度、戦前からも或程度山をやっていた人達が去って、全て戦後派ばかりで新しい阪大山岳会を築き上げようとしていた頃からリーダー会の特色はその構成員の立場が対等で且つフリーであることだろう。"リーダー会のメムバーは阪大山岳会の顧問だ"と云って笑ったことがあるが確かにこの一面を表しているよう。チープリーダーの考え、或は部の趨勢に関係なく単なる思い付から一寸した研究事項まで自由な立場で、又、この席上に関する限り責任もなく持出し、話合い、討論した。それだけにリーダー会の面々は山については種々研究し部のことについてはあれこれと観察しており、そして愈々事が決まって実行する段になるとそれらリーダー会の結論はチープリーダーの意志として代表され次々の計画に反映されそれにかくれて見えなくなってしまったが、皆気持よく一生懸命やって来た。こういうリーダー達は即ち"縁の下の力持"であり、こうやって阪大山岳会は成長して来たのである。

その後、阪大山岳会も随分世帯が大きくなった。部員数から云っても優に二倍以上になった。し愚案の計画も次々と片附いていった。しかしそれ丈に部内の問題も多くなって来ようし、計画の立案、遂行にも種々の制約が出て来る。更に厄介なことには我々知きウルサイOBが多数出来た。OBは新人と異り年もいっており経験も豊富なだけにもっと手に負えない代物になり兼ねない。こういう時、リーダー達一緒の下の力持達は今迄より以上に頑張らねばなるまい。山について考え、部員について観察し、

OBについてはうまく利用し、山行にも現われない胃の拵れる仕事をコツコツと片付けて阪大山岳会をうまく運営していかねばならない。家が大きくなればなる程、シッカリした土台が必要であり、土台が頑丈であれば、それだけ又大きな家がその上に出来ていく。願わくばリーダーし諸君又これからリーダーとなるべき諸君、より頑丈なより有能な家の下の力持になって戴きたい。

夏山合宿報告

〈1955年〉

木村裕一

南アルプスに夏山合宿をもって行ったことに就いて、関西学生山岳連盟の報告会の時、いろいろ質問を受けて了悉ったのであるが、別にそれ程大きな担いがあった訳ではない。部員の最大公約数が他人に煩わされない、落着いた合宿を希望したまでのことである。只ここで留意すべきことはかゝる潔癖性、孤独性が我々の弱点ともなるということである。

以下は山行記録

日時　一九五五年七月十八日〜七月二十八日

参加部員

(C.L.)木村裕一　(SL)宍戸　元　(装)山本進一郎

(食)西川元天　(記)辻川　眞　村瀬泰弘

岡田博司　四方大中　寺田満洲朗

高木俊夫　　山田良平　　樋下重彦
飯田　稔　　大津孝和　　河合
松本保枝　　(OB)大村一生

七月一八日　大阪発　一七時一〇分（身延線廻り）
七月一九日（小雨）
甲府着　七時四六分
買物の后、貸切バスにて夜叉神トンネル入口に向う。途中芦安部落にて食糧調達のため先発の大村、宍戸が合流す。
トンネル入口発一一時五五分
夜叉神峠小屋着　一時三〇分
點差し　三時三〇分
荒川口　六時三〇分
夜叉神のトンネルは八分通り完成、トラックは入口まで往復していた。
夜叉神峠で初めて現われる北岳方面の眺望は典型的な南アルプスの姿であり、折から立ち昇るガスを加えて我々の眼を奪うに充分であつた。
一旦點差に下り、岩へつりの後、吊橋を一つ渡つて荒川小屋に着く、小屋前の河原にて幕営。
七月二〇日　晴後雨後曇
荒川口出発八時、後発九時
野呂川は径らしきものなく、河原沿いに行く。時々出喰す岩場では重い荷物に苦しむ。なかなか道ははかどらず、後発隊宍戸、西川、辻川、大村は何時迄も追いつかない。先発隊でも寺田高木の調子が悪く遅れる。四時頃後発隊の連絡あり。故障者が出来た為、深沢から少し上つた所の岩小屋にて一泊を決定、止むを得ず、寺田高木は立石の岩小屋にて泊るよう連絡す。本隊は赤ぬけ沢手前にてキャンプ。六時三〇分。
陸地測量部の地図五万分の一の大崖頭山の北から巻いて野呂川に下る点線道は少し荷物を持つと通過不能なるも近き将来には立派な道が出来る由。
七月二一日　晴後夕立

キャンプ地出発九時
玄河原小屋、一一時発　二時三〇分
白根大池、三時
朝、後発隊を援助すべく対嶺を下らす。
キャンプ地より危ッかしい渡渉を二度、視界が開けたと思うとそこが玄河原であった。
荒川口から玄河原まで都合四度の渡渉を必要とした。
白根大池着後、木村、山本、岡田が玄河原まで後のものを迎えに行く。後発隊の玄河原着が非常に遅れた為、山本のみ大池まで登り、後は小屋に泊る。
七月二二日　晴後曇
玄河原　発六時
大池　着九時、発九時四〇分
大樺沢二股　一一時
午後から新人グリセード
大池から大体等高線沿いに進む。踏跡は身軽な装備でバットレスに行く人達のものらしく、定かでない上に急傾斜のトラバースなので非常に苦しかった。
大樺沢両股附近にはキャンプサイドらしき場所は全くない。右股上流約三百米に四五人用の長衛の岩小屋があるだけ。止むを得ず傾斜約七度の草地を手入れして設営。
大樺沢左股の残雪は傾斜が緩く、最上部短距離がグリセードの対象となるのみ。従ってグリセードの本格的練習は望めず、形だけの練習を行う。
七月二三日　雨　停滞
七月二四日　雨　停滞
雨天でも炊事当番は五時に起床し、朝食の用意をする。朝食が終っても雨が止まず、二日を無為に過す。
ポリエチレンをフライに使ったが非常に調子が良かった。
七月二五日　晴後曇
北面上部はガスに包まれ、何時降り出すか判

らない様な天候・加えて中央バンドへのルートが不明の為、木村、宍戸、山本、西川、村瀬、四方の六名が北岳バットレスの中央バンドより各尾根の取付き附近を偵察す。

大村OB、他新人六名は八本菅沢より北岳――二段窪を踏査。

辻川・岡田は、東北稜―北岳―左股を踏破。

七月二六日　晴

第一尾根　宍戸、村瀬
第三尾根　木村、寺田
第四尾根　山本、西川
第五尾根　① 辻川、高木、山田
　　② 四方、樋下
東北稜　大村(OB)、大井、飯田、松木

七月二七日　晴後曇。

第一尾根　四方、山田
第二尾根　宍戸、西川
第三尾根　辻川、飯田
第四尾根　大村、岡田、
第五尾根　寺田、河合、樋下
　　村瀬、大井、松木
中央稜　木村、山本

七月二八日　晴

両俣　発　七時三〇分
白根大池　八時三〇分
広河原小屋　九時三十分　発九時五〇分
広河原帳　一時一〇分着　発一時四〇分
赤薙沢出合　着三時　発三時四五分
仙水谷出合　五時一五分
横手　七時二五分―(バス)―韮崎駅

以上

北岳合宿雑感

重い荷物を担ぎ一七七〇米の帳を越え、径なき沢を何度か渡渉し、再び胸突く坂をあえぎ登り、大樺沢両股に着いた時、正直なところ、ほっとした。七月二五日、偵察に終止したのもかかる気持が全部員にあつた為に起因する。

新人にとつて南アルプスのスケールの大きさ

は想像外のものであつたろう。非常に苦しく、而も酬いられる所の少ない合宿であつたと思うかも知れないが、かくして得た山の初印象が、やがては正しき自信を生み、立派な岳人に育て上げてくれる源泉となつていることに気付くであろうと信ずる。

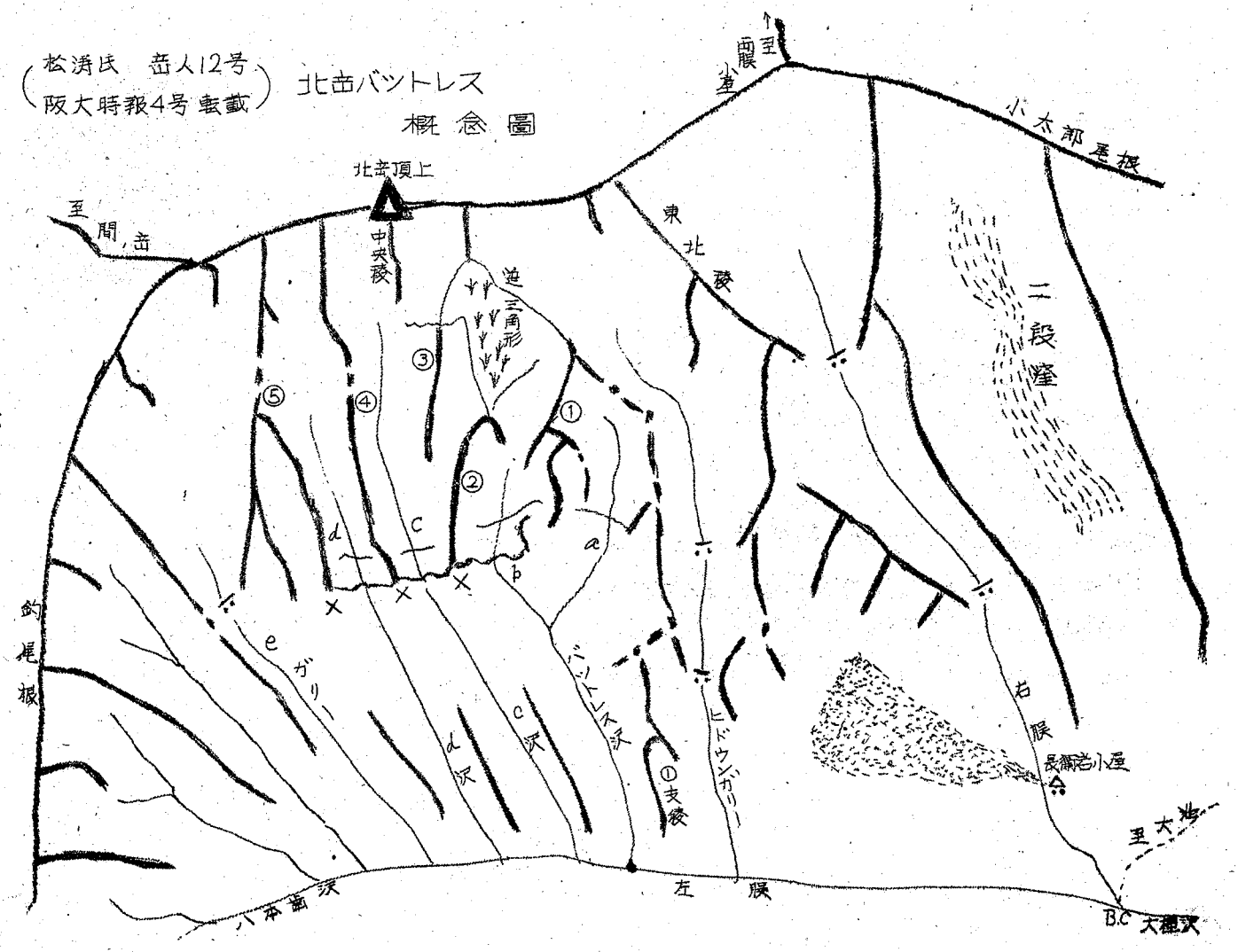
南アルプスの夏の天候は北アルプスよりも悪く、北岳が完全に姿を見せたのは一日しかなく、毎日午後になるとガスが下りて来た。我々は両脚に入る日から五時起床、六時出発を厳守し、三時頃にはB.Cに帰つている様にした。

然若的に合宿を反省すると、例年のやゝもすると観念的になり、勝な形式的な合宿形態を打破し山全体を把握するのに役立つたと思つている。かかる合宿を四年に一度位行うのも良いと思う。

——終——

（松濤氏　岳人12号
阪大時報4号 転載）

北岳バットレス
概念圖



○第一尾根　　四方記

七月二十七日　晴

パーティ　四方・山田

午前九時、取付きのバンドに着く。少し休んで早速登り初めた。最初の一ピッチで第一尾根を横切つているハイマツのあるテラスに出る。それを左にトラバース、尾根の左側に出る。昨日の宍戸、村瀬の両氏がリッヂ通しで途中のオーバハングを乗切るルートを採つているので、今日は左側面のガリー沿いに登る。此處は岩が非常に脆い。あまり快適とはいえない。三ピッチ程上げた所より、リッヂを目指して脆いルンゼを詰める。今日の岩場はガスが巻いて居り、時々その切れ間より第二尾根がすごい容姿をのぞかせている。注意はしていたが案のじよう、小いさかつたがホールドが一つくずれた。それにつられたように次々と落石。すざまじい反響を残して石が落ちて行く。ジッヘルをしていた山田君にも二、三当つたようだが幸い怪我はなかつた。小生は右手首をちよつと切つた程度で済んだ。まずまず運がよかつたと云えよう。すぐに手近かな割目を探してハーケンを打ち込む。この悪場では意外にも又、幸運にもぐつと吸込まれるようにハーケンが効いてくれた。やがて小さな少し傾斜のついたテラスに登り着く。そこから右にトラバースして主稜に出る。二ピッチでサイルを解く。後はお花畑のある快適な尾根だ。途中食事を摂り稜線に着いたのは十二時三十分であつた。

（中央バンド　〇九・〇〇　頂上一二・三〇）

○第二尾根　　西川記

七月二十七日　パーティ　宍戸・西川

昨日、一昨日と中央バンド迄は通いなれた道である。bガリーを少しつめて左側第二尾根のカンテ状側稜にとりつき途中でアンザイレンして主稜に上る。主稜をおおうブッシュもこの辺が上端である。主稜はまもなく傾斜がゆるし、フ

エネス状となるが、Cガリ側をからんで登る。次のピッチで釣尾根からも顕らかに認められる赤茶けた大チムニー下のテラスに立つ。第二尾根はこゝから約八十米垂直に高度を増している。ピトン一本きかせて第一尾根の落石の音を耳にbガリ側へ一ピッチトラバース。つるつるの逆層のスラブでフリクションだけを頼りにカンテの手前にあるミヤマハンノキの生えたテラスに着く。途中ピトンを二本打つたがこゝで更に一本うたわせてカンテを乗りこえそこから上にはしつている草つきリンネを登りハンノキの生えたバンドを右へトラバースしチムニーにはいり込む。五米ですぐチョックストーンにぶつかるが、これは乗り越える。岩と岩とに狭まれた青い空は明るく少しのぞいたハイマツにはげまされる様に更に十米上り左へ五米ばかりトラバースしてハンノキのテラスに立ち左のカンテを乗越えると逆三角形の下の頂点当り四十米のザイルが伸び切つたところでザイルを解く。主稜に出てから三十米6ピッチの登攀だつた。ハイマツに囲まれたお花畠で昼食。頂上で既に到着していたパーティに迎えられた。

（B.C 〇六・〇〇、中央バンド〇九・〇〇、頂上十四・〇〇）

○ 第三尾根

木村 記

七月二十六日　パーティ　木村・寺田

B.Cから左眼を登り、バットレス沢の出合まで約一時間を要す。そこからルンゼに沿って登る。中央バンドの下の壁は沢を石に採つてゴルジを登る。危険とまでいかないが非常に不安定で落石頻り。不安定な草付きを登ると左手に第一尾根から草のついたルンゼが入つている。灌木に掴りながらオーバーハングを越すと急な草付きの斜面に出る。登りつめた處が第一尾根主稜である。そこを越えた所から中央バンドが幅広く横に走つているが相当急斜面である。しかしやはりバンドらしくお花畠が拡がつている。

そのバンドに沿って大きく迂回するとC沢に入る・少し登って急な雪渓をトラバースすると、第四尾根の取付きがある・第三尾根へはもう少しCルンゼを登る・何處から登っても良い様な取付きである・コンティニアスで暫く登ると這松のブッシュ漕ぎが始まる・終った所で第一回の昼食をとる・第二尾根の連中は、マッチ棒の頭位の大きさに見える・第四尾根のパーティは快調なピッチで登っているのが割に近く眺められた・昼食後、Cルンゼ側のV字型の岩の割れ目をニピッチ程登ると赤茶けた脆い岩質のオーバーハングに出喰わす・それを右に迂回し、第二尾根の方に廻ると、そこが逆三角形の一辺である・そこから頂上までコンティニアスで登る・頂上で全パーティの集結をまって八本歯沢よりB.Cに帰還す・四時三十分・

（B.Cの六・〇〇　頂上一三・二〇）

○中央稜　　木村記

七月二十七日　　パーティ　木村・山本

第三尾根と第四尾根の間のCルンゼをそのまま登りつめると、最の肌を思わせるような茶褐色のオーバーハングが巨大に張出している中央稜直下に至る・時々落下が大きな反響と共に中空から降ってくる・周囲は薄暗くじめ〳〵した感じで余り気分の良い所ではない・

オーバーハングの直下を横に走る大きなリスを利用せんとするも不可能と思われたので少し左手の第四尾根側の侵蝕された赤茶けたクラックを試登しピトンを打つも利かず、元のルートに戻る・リスの間に二本のピトンを打ちトラバースする・足場がないので全く腕力に頼って三米位、微妙なバランスでテラスに立つとオーバーハングが体を外へ押出す・片腕がバランス保持のために必要なのでピトンがなかなか打てない・隣の第四尾根のパーティはとっくに頂上を

通過し、遠くヤホーが響く。ガラがだんぐ、濃くなる。時間が遠慮なく経過する。気休め同根のピトンを打ちやっとCルンゼに入る。下から四〇米のザイル一杆。後の山本は時間をかけないため、殆んどザイルをたよりに登る。次に十字状のルンゼを二ピッチ登る。ここから上部は岩頭が硬く、手に快感さえ与える。早くリッジに出るとオーバーハングが二、三あるようである。三ピッチ程、後側を登ってからリッジに出る。後は高度感があるだけで技術的に困難な處もなく頂上に至る。

（B.C.〇六・〇〇　取付き一〇・〇〇　頂上一五・〇〇）

○第四尾根

七月二十七日　パーティ　岡田・大村OB

第四尾根を末端から取付くならば手に負えないオーバーハングが連続していて相当時間が掛かるものと思われる。dガリー側からの取付は横に走る二、三のバンドを利用すると聞くが、私達は中央バンドを経て、Cガリー側から取付いた。Cガリーを埋める豊富な残雪を踏んで少々登ると第四尾根へはどこからでも容易に取付けるように見える。トラバス気味に草付きを登り尾根に出た所は、マッチ箱から約八十米下部のテラスで、ここでアンザイレンする。濡木はこの辺りで終りここより上部は小さなハイ松と高山植物におおわれて明朗な尾根となる。マッチ箱の壁は石壁をからみ間隙はなく、第一コルの上も容易である。第二コルの上も直登出来るがフリクションをきかせて右搦みに登るとすぐマッチ箱の最高点である。第二尾根から第五尾根まで一望のもとに眼下に見渡し仲間にコールを送る。Cガリーで別れた中央後に向ったパーティは未だ取付き点で困った様子をしている。第三のコルへの下降はアップザイレンし、そこから中央後パーティへルートを示唆するが、洞窟の様に陰気なこのバットレスの核心では反響するこだまも不気味である。第三のコルの上は滑らかなスラブのカンテであるが、左側の側壁に

縦に走る小さなクラックを一息に登り、行きつまった處で左側の狭い草付のガリーに入る。このガリーは次第に傾斜を落し、上部のハイ松まじりのお花畑で消えている。アンザイレンしてから十一ピッチでザイルを解き、後は畳敷まじりで高山植物を踏みながら、緩斜面を主稜線に飛び出した。

取付き（九・四〇）――頂上（一二・一五）

一九五五年　夏　山

（黒部源流から蒲田川へ）八月一日～八月五日。

八月一日（晴）出発（九・一〇）―祖父岳の肩にルックデポー雲の平歩―祖父岳（一二・二〇）―割物東麓（一三・二〇―一三・四〇）―高天原（一五・〇〇―一五・三〇）―大東鉱山事務所（一六・〇〇）―奥のタル沢出合（一七・五〇）　奥のタル沢には石斧をはなれて林の中に明瞭な道がある。高天原は高山植物が咲き乱れ、無数の小池は水晶、赤牛を絵の様に映している。道は一旦赤牛方面から来る小さな支流に出て、約二百米にして奥タル沢に合す。

八月二日（晴）出発（一〇・一〇）―立石（一二・三〇）―真砂沢出合（一八・一五）。昼食に岩魚を手掴みでとった川しながら、のんびりと河原の石を踏んで行く。

八月三日（晴一時曇雨）出発（一〇・〇〇）―赤水沢（一一・三〇）―五郎沢（一三・三〇―一五・三〇）―祖父平（一六・三〇）―三俣連蓮テント地（九・四五）。

八月四日（晴一時曇り）出発（一〇・四〇）―双六小屋（一二・三〇―一三・三〇）―大野間東麓（一四・四〇）―蒲田川左俣（一七・〇〇）―河原で野営（一九・三〇）

双六谷に下る最初の計画を変更して、各山の偵察旁々大野間沢を下る事にする。ブッシュで道を見い出せず下降に可成り手間取る。大野間沢は下から見ると岳沢の規模を小さくした様な感じで、冬期の雪崩は笠岳側の急峻な幾つかの

ルンゼ状の沢が問題となるであろう。

八月五日（晴）出発（九・二〇）―新穂高温泉（一〇・五〇）―槍尾（一二・二五）―高山―帰阪。

岡田・東 OB

冬山合宿報告

―1955年度―

木村記

三年越の懸案である春の黒部横断、剱登頂という大きな目標をもちながら、更に一つ厳冬期に大きな組織的計画を持つた理由が二つある。一つは最上級部員が多数春山に参加出ないかも知れないということ。今一つの理由として冬春の二季共に大きな計画を樹て、無理なく動けるだけの部員を揃するまでに我が山岳部が成長したという確信を持つたことが挙げられる。

夏山が終り、冬山計画を本格的に練る頃、夏の北岳バットレスを消化したのち引続き冬の実力養成に主眼を置こう。我々は双六合宿を画策した。

夏山合宿の後半として、木村、松本が蒲田川右股を歩き、東 OB、岡田が大沼東越から蒲田川左股を歩いた。秋になつて尾藤・田島両 OB が下から大沼乗越を通つて双六小屋に入り、冬用の薪を作つて置いて下さつた。続いて辻川・樋口二君が食糧の荷揚げをし、新雪の頃、宍戸等女子部員を含めて最終的な偵察と荷揚げを行つた。一方ルームでは、計画として最終目標を雲の平より黒部を渡り、薬師沢より薬師岳往復に置き、余力で赤牛岳往復、笠ヶ岳、槍ヶ岳往復の放射状登山並に烏帽子への縦走を立案していた。その間、関本・山本が東京より三枝 OG の参加を得、春山の準備として昨年度失敗した吊越しの準備に御前谷より阿曽原に抜けていた。かくして我々は十二月を待つたのである。

メンバー

先発隊　木村(CL)　兵戸(SL)、石沢、村瀬(記)、
四方、山田、辻山、石野カメラマン
（毎日新聞）

後発隊　関本、山本(義)、巻中、西川、辻川、
岡田、尾藤(OB)　以上十四名

行動概況

12月24日　先発隊　中尾部落　中島氏宅泊

12月25日　晴後曇　二俣から少し上までトラックに乗るも積雪のためそこから歩く。木村、石沢、村瀬、石野カメラマン四名は雪の少ない中に一気に双六に入るべく、個人装備と食糧少々及びスキーをもって出発するも二千米附近から積雪が深くなり、小屋へは行けそうもないので引き返す。後の四名は中将橋の上の飯場に荷物を揚げ終り一部を大沼沢の左俣出合まで揚げていた。

(註)　左股には立派なトラック道が左岸を走りその道は大沼沢出合と二俣中央部辺り（石岸に岩小屋のある手前）で橋（中将橋）を渡り、そこからまだ五〇〇米以上も伸びている。

大沢東越とは陸地測量部の地図（五万分の一）で、槍沢岳と笠岳を結ぶ尾根中の標高二五八八・四の三角点のあるピークの西南にある二四五〇位の鞍部を云い、そこから蒲田川左股に入る沢を大沼沢という。夏道が今年開通した。

12月26日　曇時々小雪

兵戸、石沢、四方及び石野カメラマンが再び双六小屋に入るべく七時半には飯場を出て行った。残りの者は大沼沢出合（これから出合と略す）まで荷揚げをする。連日の好天と雪の少しうちに双六小屋に入るべく木村、辻山が後発隊を中尾まで迎えに行く。しかし十日位に続いた好天はそれ以上我々を待つて呉れなかった。十時頃飯場に帰ると丁度兵戸と石野さんが下山して来た所だった。

兵戸の報告によると上の状況は次の様なものである。

出合を十時・東麓に三時半・そこから山腹を巻いて双六に出る秋に通つた新しい道を進むも深雪が胸近くあり、三十分で百米位しか進めなかつたという・四時過ぎ断念して下山した・時間を稼ぐため極力装備を軽くする必要があつたとはいえピヴァークの装備をも割愛したのは、稜線の積雪を過少評價したことと共に我々の犯した第一の失策であつた・

石灰、四方は我々のポッカして置いた出合のテントに泊る・

かくして我々のデスクプランは最初から完全に狂つたが、飯場の雰囲気は後発隊の連中を加えてなかなか意気盛なものがあつた・

12月27日　曇後晴

下に長く居れば居る程、我々は不利な立場に置かれることは明らかである・木村、関本、山本、本中それに尾藤OBの四人が十人のサポートを受け万端を期し小屋に登ることにする・サポート隊は小屋に揚げるべき荷物の殆どをもち、後の四人は個人装備にビヴァーク用装備とスキーを持つ・途中で石野さんの注文のポーズを創つたりして時間を喰つたが昨日のラッセルが相当役に立つた・

飯場発七時、大沼乗越四時半・

横巻き道が使えないので稜線沿いに行く・二五八八・四米のピーク迄は腰廻りまでもぐり、その頂上に至る頃にはとっぷり日が暮れていた・稜線は風が非常に烈しかつたが、幸い天候が良くなり月光が明るく、槍穂高連峰を浮彫りにしマッケに着いている雪の結晶にダイヤモンドの様な輝きを与えていた。

双六小屋着　八時半

石野氏は本日帰られる・カメラマンとして非常に苦労をされた割に収穫が少なかつたことは我々としても心残りであつた。

12月28日　風雪

下では八時に出発・吹雪のため出合で引返す・上では・正午、昨日の約束に従つて猛風雪を衝

いて飛び出したが、全然進めず小屋に引返す。

12月29日　風雪

小屋には主食豊富なるも副食乏し。下では、食物が乏しく雑炊、但し石野氏の置土産の野兎を喰つた由。

12月30日	風雪	双六小屋
12月31日	〃	〃 中崎稜の小屋
1956年1月1日	〃	〃

1月2日　停滞中毎日の如く下では中尾に食糧を調達に行く。と云うのはこんなに長く下に居る積りがなかつたので食糧は全部大沼東越に揚げてあつた。

上では木村、岡本が正午頃からガスと風が少し弱くなつた間を衝いてコルの食糧をタックする。岡本、顔面に軽い凍傷を受く。

1月3日　快晴、　稜線も無風

下では炊事当番が二時半に起床、出合でやつと夜が明ける。五日間の降雪の為、板戸から下りている沢には幾本もの雪崩跡があつた。この沢は降つたら深く積ることなく雪崩ている様子である。従つて降雪中の通過は絶対避けるべきである。

東越に着いたのが十六時頃であつたが、そこから荷物が増えた為、小屋に入つたのは最終二十二時であつた。

小屋では朝この快晴が夜半まで続くと云う見通しを立て、後発隊へのサポートは木村、李中に任せ、岡本、尾藤OBは笠ヶ岳を攻撃した。小屋出発十二時、大沼東越十三時半、板戸十五時四十分、笠岳十七時十分～十七時十五分、双六小屋二十三時三十分

1月4日　小雪

動いて動けない天候ではなかつたが、昨日は遅くまで行動したので休養日とし、今後の計画を練ることにした。双六岳の双六池側の斜面でスキーを楽しむ。

今後の予定として、明日天気になればテント

を出せる所まで出し、次の晴天を利用して撤収する。明日が行動出来ない天候なら次の行動出来る日に下山することに協議決定する。かゝる決定の是非には非常に問題があったようである。と言うのは我々の数少い冬山の経験によれば、ここ三、四年の雪期登山に一週間も閉じ込められた例は殆どなかつたし、あった時でもその後は二、三日の行動日に恵まれていた。故に公式的には冬山の悪天候は皇々理解しているつもりでも実際を判断する時、経験を備重し、希望的観測に傾く結果となったようである。かかる友者は停滞中の無聊が重なるにつれ激しくなり十一日山日記の気象の頁を再読した時、最高に達した。

1月5日　曇

出発　八時三十分

三俣蓮華頂上　十一時

鷲羽ー三俣蓮華コル　着十三時、テント設営後出発十三時四十分。

小屋着十六時三十分。

A隊　鷲羽岳頂上十五時、テント帰着十五時二十分

B隊　黒部谷　十五時までスキーで下り、テント帰着十六時二十分

強風がガスに雪さえ混えていたがトレーニングをいう意味で一応出発することにした。多分小屋の背後の山まで天候はもたないだろうと思つていた。双六岳の頂面を巻き、三俣レンゲから南へ数えて二ッ目と三ッのコルに出る。非常に雪が深く、道ははかどらないため、始め計画した夏の横巻道を通るのをやめ稜線に出、アイゼンをつける。

この稜線をスキーで飛ばすことなどは我々のスキー技術をもつてすれば到底望めないことである。天候は何處まで行つても悪くもなるならない。ラッセルで時間をつぶしたので三ッ俣蓮華小屋を通過した所で早くも引き返さねばならなかつた。赤牛隊も黒部隊も同じ所に天幕を張つた。かくして一週間の吹雪との根気競べが

始まつた。

A隊（赤牛隊）メンバー　杢中(L)、石沢、四方

B隊（黒部隊）メンバー　吳戸(L)、山本、西川、岡田、

夕方の完全な無風状態、微かな音をも吸い込むかやき山波の佇ずまいこそ正に来るべき一週間の嵐の前の静けさであつたようである。

1月6日　曇後風雪

小屋では八時に穂に向け出発。

樅沢岳頂上九時

樅沢岳頂上までとにかく強風を衝いて登る。北方後立山は黒雲に覆われ、本格的な嵐の来襲は時間の問題であつたのでそれより小屋に引き返す。この日、天幕の連中が敏速に動いて居れば小屋まで帰ることが出来たであろう。

1月7日　風雪　停滞

1月8日　〃　〃

天幕では少し風が弱くなつたのでテントを撤収したが蓮華小屋に辿りつくのがやつとであつた。二時間程かかつて小屋を掘り出し中にもぐり込む。

1月9日　風雪　停滞

1月10日　〃　〃

小屋でもいろ〳〵なものが欠乏し出す。

1月11日　風雪　停滞

1月12日　ガス後晴

四六時中、食事の時と便所へ行く他は眠つているので、昼と夜の区別が判然しなくなつてくる。度々、暫く止む風に欺むかれたが遂に三時過から星が見えだした。今日を逃せば本当に大事に到ることを実感として感じながらアタック隊を迎えに行く準備をする。

八時小屋発、蓮華小屋着九時四〇分。

双六小屋十二時三十分着、十三時三十分出発

乗越十六時着〜十六時三十分

大沼沢の積雪は下りでも腰以上を没する為、行程は非常に渉らない。三十分程遅れた最後部

は三百米位で先頭に追いつく。日はすでに没し、たきがれが間近く迫る。そこで我々はスキーをはくことにしたが、荷物と技術の相異から先頭と最後の間隔が非常に開く。しかも先頭でさえ出合に程遠い中腹で暗闇に追いつかれ、再三、道に迷う。懐中電灯は殆どが用をなさず、二、三個が鈍い光を発しているのみ。加えて雪崩の為地形が一変し、四方・石沢が天幕を張った登山口等跡かたもない。板戸から落込んでいる急な谷は降っただけの雪を随時、押流すらしい。先頭は出合に二十時頃着く。一時間程待ったが寒さに耐えきれず出発。午前一時頃、例の飯場に着く。後続も二時半には揃ったがスキーの調子の悪い西川・佐山は遂に出合迄下れず、途中で穴を掘ってビバークする。

1月13日　小雪

石沢・四方・山田は一挙帰阪すべく七時半出発。残りの者は後の二名を待ち、中尾三時半に帰る。

後　記

1. 大石沢及びその周辺

大石沢自体が雪崩ることは先ずあるまいと思われるが、その中腹から板戸の方へ入っている沢は雪が降るとその都度雪崩れている様子であるから、降雪中は絶対近寄れないし、左俣出合に天幕を張ることも出来ない。然し、平年なら十二月一杯なら何んとか使えるであろう。それ以降の登路は二千五百八十八・五米のピークより東南にカギ形に出ている尾根しか考えられない。大沼東麓から双六小屋へは横巻道より稜線の方が絶対有利である。

Ⅱ、双六小屋より三俣蓮華への稜線はワカンよりもアイゼンの方が快調な位雪がしまっている。しかし小屋からの横巻道は雪が深くスキーが最有利であるから計画的に非常にむずかしい。

Ⅲ、黒部源流（雪の平遠望）

Ⅳ、鷲羽の稜線（手元にデーターなし）

かくして、雪の平の雪も踏めず、薬師沢の影さえ知らず、我々の計画は壊滅した。悪天候にはばまれ、行動日には殆ど夜明けから真夜中迄行動し、悪戦苦斗を重ねたが報いられなかった。然しこの計画が不可能と断定する材料は何もない。希わくば、我々の遺した未完成な山行を、いつの日にか補い、喜びを共に頒ち合う日の来たらん事を。

冬山停滞一週間

（於　三俣蓮華のコル）

一月六日

朝七時頃目を覚ました。天気はガスがあるが視界は利く方で風が少々ある。テントを撤収するつもりで食事の仕度にかかったが、この間に天気は次第に悪化して、風雪に変って来た。隣にナイロンテントI号（宍戸、山本、西川、岡田）を張っていた黒部渓流隊と相談をして天候を見ることにして、この日は停滞と決定。午後七時頃星空が見られ、明日は撤収が出来ると、皆喜び眠りに就く。

一月七日

午前四時頃、隣のテントより、宍戸リーダの腹痛を知らせて来た。天候は又悪化し外は風雪になっている。宍戸氏自身（医学部三年）虫垂炎ではないかとの判断で、取りあえずナイロンテント2号（巻中、石沢、四方）より石沢氏が手当をしに行く。忽に角、抗生物質でおさえ、2号テントで両テントの朝食を作り、風雪の止むのを待ってベースキャンプへ知らせに行く準備をする。昼頃になって、この薬の副作用の下痢で腹痛はとまり、一同ほっと安堵の胸を撫でおろす。この日も結局停滞。

一月八日

目を覚ますと風はあるが、ガスが少しうすれその間からぼんやり鷲羽の頂上が望まれた。早速テントをたたみ出発（午前十時）。しかし、

・出発して間も無く天気がくずれ風雪がひどくなる・視界は三十米位しか利かない・やっと雪に埋れた三俣蓮華の小屋を発見、風雪の中を二時間程かかって入口を掘り当てる・中はあまり雪が入っておらず、無風状態である。やれ〳〵といった所・小屋の中にテントを張り薪を燃して暖をとる・（尚石油はテント撤収の際二つのラジウスに一杯満して残りは捨てる）

一月九日

天候は相変らず悪い・この日より停滞が長びくことを考慮して、食糧の食い伸ばしを始める。トースト（一人四枚（一日二食））・砂糖が欠乏しはじめたので塩ミルクにする・燃料は少しはある・煙突を屋根から出し小屋中に充満した煙の逃げ道を作る・

一月十日

今日で停滞五日目・風と雪はやまない・頭の上をごうゴうと風がかすめる・小屋の戸口は殺ら除雪をしても二、三時間も経てばすぐ埋れてしまう・この日、朝起きると全員頭痛を訴え出す・小屋の中で薪を燃やすので炭酸ガス中毒にかかったらしい・立ち上ると心臓の動悸が激しく、ふらふらする・交代で戸口の雪かきをする・外に飛び出すとすぐ平常にもどった・この日はトースト三枚に減食・副食物は塩とコンショウのスープ・

一月十一日

相変らず風雪が続く・目を覚ますと無気味な風の音が聞えるだけである・食糧はだんゞ乏しくなる・停滞日は二食だが、今日から一食につきトースト二枚になる・この調子で後二日の食糧が残るに過ぎない・勿論皆・個人装備の食糧は出し合う・ストーブを囲みながら、皆いろいろ今後の検討をした・終いには、「我々は何の為にこのような困難を敢えてしてまで山に来るのであろうか」など、云い出す者もあり・お互に話し合ったが結論には達しなかった・又、結論が出る筋合のものでもないだろう・結局、

「何でもいいから腹一ぱい食いたい」というのが皆の本当の気持であっただろう。しかし、皆互に励まし合って我々の現実の立場をそれ程窮迫したものとは考えていなかった。全員明日の快晴を祈って眠りに就く。

一月十二日

六時に目が覚めた。風の音はやまない。又今日も停滞かと、皆げんなりした顔になる。突然外に様子を見に出ていた者が「槍が見えるぞ!!」と叫ぶのが聞えた。皆先を争って外に飛び出た。ガスはうすれ、槍ヶ岳がくっきりとその姿を現わした。朝日がさす。皆んなこの感激は一生忘れられないものとなるであろう。

残った食糧を全部つめ込み、我々を救ってくれた小屋に別れを告げた。その時「ヤッホー」と、皆の安否を気ずかう木村リーダのコールが聞えた。皆元気な喜びに溢れたコールを送り返した。迎えに来た仲間と手を握り合い、再会の喜びに胸を震わせているお互の目には涙が光っていた。

了

昭和廿一年十一月廿八日

—四方大中記—

鷲羽岳アタック

四方大中

風は可成りあったが天気は晴、我々はアタック隊、サポート隊を含めて総勢十四名。午前八時過ぎ双六小屋を出発、稜線沿いに三俣蓮華を経て、鷲羽岳と三俣蓮華とのコルにテントを設営したのは正午を三十分廻っていた。何しろベースキャンプにはいるのに一週間の停滞を余儀なくされ、結局十一日もかかっているだけに、最初の目標であった水晶、赤牛のアタックは不可能と見られ、その結果、目標を鷲羽岳に切り換えた訳である。

さて、鷲羽のアタックは本中(リーダー)、石沢、四方の三人、サポートは木村リーダ、村瀬、片山の三名で、結局アタック隊のテント地出発

は、午後一時三十分、鷲羽の登には相当長く、稜線の風は強い。ルートは大体夏道を採ったが、頂上に近ずくにつれて風の当る所は凍りついており、所々吉凶が顔を覗かせている。途中一度休んだが寒いのですぐ又黙々と登りだす。三時遂に頂上に着く。視界はよく利き穂高をはじめ、北アルプスの峰々がきれいに見える。二十分程頂上に留り記念撮影などを済ませた。この間写真のフイルムを入れ換えていた石沢氏の手が見るく紫色になった。

何だか物足りない感じがしないでもなかったが、これ以上アタックを進めることは大した意味もないと考えられ、又帰りの時間も考慮して吹きやまぬ風の中を凍り初めた雪にアイゼンを利かせながらテント地に向った。

食糧報告

岡田博司

積雪期登山における食糧は、一般に登山食糧が備えるべき全ての必要な條件を具備すると同時に、更に、一般に積雪期登山が特に要求する諸條件にも対応して行かなければならない事言う迄もない。しかしながら、食糧計画が一個の具体的な登山計画をその基礎として樹てられる以上、根本たる登山計画を適確に把握し、如何にその計画の個性に応じた具体的な食糧計画が成されるかは、常に重要な問題であろう。

今回の計画に当っては、参加人員が意外に少なく荷物のボッカに多くの力は望めないし、更にはアタック態勢の速みやかな確立に引続くアタック隊の独力による縦走という形式をとる事に着眼し、食糧計画のポイントは軽量化、アタック隊食糧については、特に調理の簡易化という点を中心に考えるべきであるとした訳である。

食糧の軽量化は梱包と食品について考えられるが、食糧計画自体が如何に綿密な検討をへて、あらゆる予想される事態に対處し得、しかも余剰食糧を最低限度にとどめ得るかと云う点が最も大切なところである。

梱包については、C_1近のボッカに堪え得る程度を目標とし、大巾にポリエチレンを採用すると共に、個々の食品についても可成りの考慮を拂った積りである。結果的に荷物の軽量化は装備の分野において特に有効になされたものと思うが、しかし食糧の分野においても漸進的に改善を試みる必要のある事は言を俟たぬところであつて、例えば、新たな梱包方式の採用とかアタック豚食糧には特に科学的食糧を使用してみるとかいつた点についても充分研究をなす必要があると私考する。

一方調理の簡易化については、アタック豚食糧において顕著に見られるところであるが、主食はクラッカーを主体として、これに食パンを配するという形をとり、副食にあつても至つて手数の掛からぬものばかりを採用した。

しかしながら、かかる方法は今度の登山計画自体が特に要請するところに即応して採られたものであつて、如何なる登山計画にも対応して行けるものでない事はもとより、一つの点にのみ固執するあまり、登山食糧が当然備えているべき他の諸点において欠陥が出て来たのでは意味がない。登山食糧の最大の要件は重労働に堪え得るカロリーという点にあると思うが、今回の食糧においてその点は兎も角としても、その他の点、例えば栄養のバランス、嗜好とのバランス等は可成り等閑視せられていたという事はある程度迄は致し方なしとしても、当然反省されるべきところである。

春山合宿

—1955年—

春の黒部下廊下横断について

宍戸　元

雪晴れの朝新越東越から見る景色は実にすばらしい。その中でも剱が源次郎を中心に平蔵谷長次郎、八ッ峰と、凹凸を激しく浮き出させ、これを男性に例えるなら、そのずっと下、黒部渓谷との間に座を占める内蔵之助平は清らかな乙女にも例えて良いだろう。その純白な肌を見せる乙女の前には右に大ダデガビンゝ左に丸山の大岩壁のナイトが聳え立つている。私達はいつしかこの乙女の魅力、いや魔力の虜になつてしまつていた。

冬の穂高で多大の成功を収めた私達は、欣喜雀躍として、ふるさとゝも言うべき後立山へと、又再び大沢小屋に立戻つて来たのである。

この行動は意識的に考え出されたというよりも、知らず〳〵の間に期せずして私達お互の心に芽萌えた、もつとも自然な流れであり、誰の脳裡にも不思議さも、疑問も生ずる余地はなかつた。

かくて、私達は後立生活の間に記憶に残つた岩小屋沢岳北峯から西北に派生する長大なしかもゆるやかな尾根（岩小屋沢岳支脈）に眼を注いだのである。更には又、岩小屋沢岳といえば、すぐに新起尾根に結びついていつた。この尾根は既に逆縦走の際サポートに使用し、既に私達の自家薬籠のものになつていた。次第に考えはまとまり、大沢小屋をベースとして新越尾根—岩小屋沢支脈—黒部下廊下—内蔵之助沢—同平という線が地図の上に書き込んだ。

五四年

五四年春は、多数の卒業生を送り出すなど参加者の都合によりA隊（川島(山)、山本(光)、土屋、

久保昭、田島昭）、B隊（尾藤(山)、矢戸、古高、三枝、山本(進)、西川、岩永）に分け、A隊は岩小屋沢岳支脈の下降偵察行を計画した。しかし同支脈二一〇〇米にACを出したが、計画不備と食糧不足のため、数日振りの快晴の日に撤収を余儀なくされた肝腎の黒部への下降路を発見出来めまいに終った。

B隊は三名の横断アタック隊を出す予定だったが、アタック・メンバーの中に病気不参加が出るなどしたため、計画を放棄し、翌年に備えてA隊の果せなかった偵察をつゞけることとした。そこで新越中尾根にAC（一、八〇〇米）を出し、新越沢を下降したが、黒部別山の壁を間近かに望む所、黒部本流への落口も間もないと思われる地点で、止むなく滝のために下降を断念し、岩小屋沢岳支脈末端から新越沢に出ている二本の平行ルンゼを登った。――このルンゼは主稜線上からも一眼でそれとわかる特徴的なもので、このルンゼの頭が支脈のほゞ末端であろうと思われる――。私達はこの頭（ドーム）（二八〇〇米）より下廊下唯一の泊場である桧水平を樹間にちら〳〵と見るに止まり黒部本流の河原にさえ降り立ち得ずに引返した。（ルート図参照）

この五四年の偵察の結果、私達は無雪期の間に徹底的に後立山から黒部への下降路の偵察、特に、実際に下廊下から逆に後立山側に取付いて見る必要性を強く痛感した。何故ならば、どこにルートをとるにしても下廊下石岸を形成している一、三〇〇米から一、八〇〇～二、〇〇〇米までの壁が常に問題になるからであった。そこで夏の下廊下偵察となり、尾藤(L)、小沢、平井、東、坐中が、桧小屋沢より桧水平にはいり、そこにベースを設置することとなった。その時の尾藤の記録から引用すると、下廊下横断に関し、全く白紙に戻って考え始めた。桧水平生活一週間の偵察活動の推移は、黒部下廊下横断に関する決定的な事は、先ず渡河自体は吊越の出来た現在、スノーブリッヂを利用するよりは吊越が優

先する事は問題にならず、その存在する場所であること。次は立山側に於いてはクラノ助沢を利用するのが最も容易である事から、此処に鳴沢小沢出合にて渡河し、クラノ助沢に出る線に対して後立から如何にしてこの部に下り立つかという点に焦点はしぼられた。勿論逃げ道の事も考慮に入れてである。

即ち、鳴沢小沢出合及び鳴沢出合を春の横断点と想定したが、其處より内蔵之助沢出合までの部分及び吊越使用不能を考えると鳴沢出合の方が有利なので、一応鳴沢に下るルートを考えた。次に、鳴沢両岸の尾根より鳴沢に下る斜面は、左岸の方が遙かに傾斜が少く、且つ左岸尾根末端の方が右岸より高度が低いので極めて條件が良い訳なのだが、右岸尾根末端まで登ってみると、何とか春の登降が出来るだろうということが分った。所が主稜線よりの状態を遠望すると、左岸尾根は赤沢岳より出発するもので赤沢岳に近い部分は非常に傾斜が急で而も鳴沢右岸をなす。鳴沢尾根より遙かに長いものであった。恐らく春にはBCとなるであろう新越乗越の事を考え合せると、一層鳴沢尾根の方が良いと言えよう。かくして此處に新越乗越より鳴沢岳に登り鳴沢尾根を下って、その末端より急斜面を鳴沢に下り、その出合の吊越を渡って、立山側は内蔵之助沢より内蔵之助平に至るルートを考えた訳だった。

しかし、谷底とブッシュに視界を妨げられた偵察は、盲人の象を觸るの図に等しかった。鳴沢尾根を登った時などは、その帰路に於いてさえどうかすると道を誤まる程で、複雑な地形で、しかも五万分の一でも細部に至るまで正確であるとは言い切れない後立山黒部側において、とてもそのルートを正確且つ精細に把握することは至難な技だった。

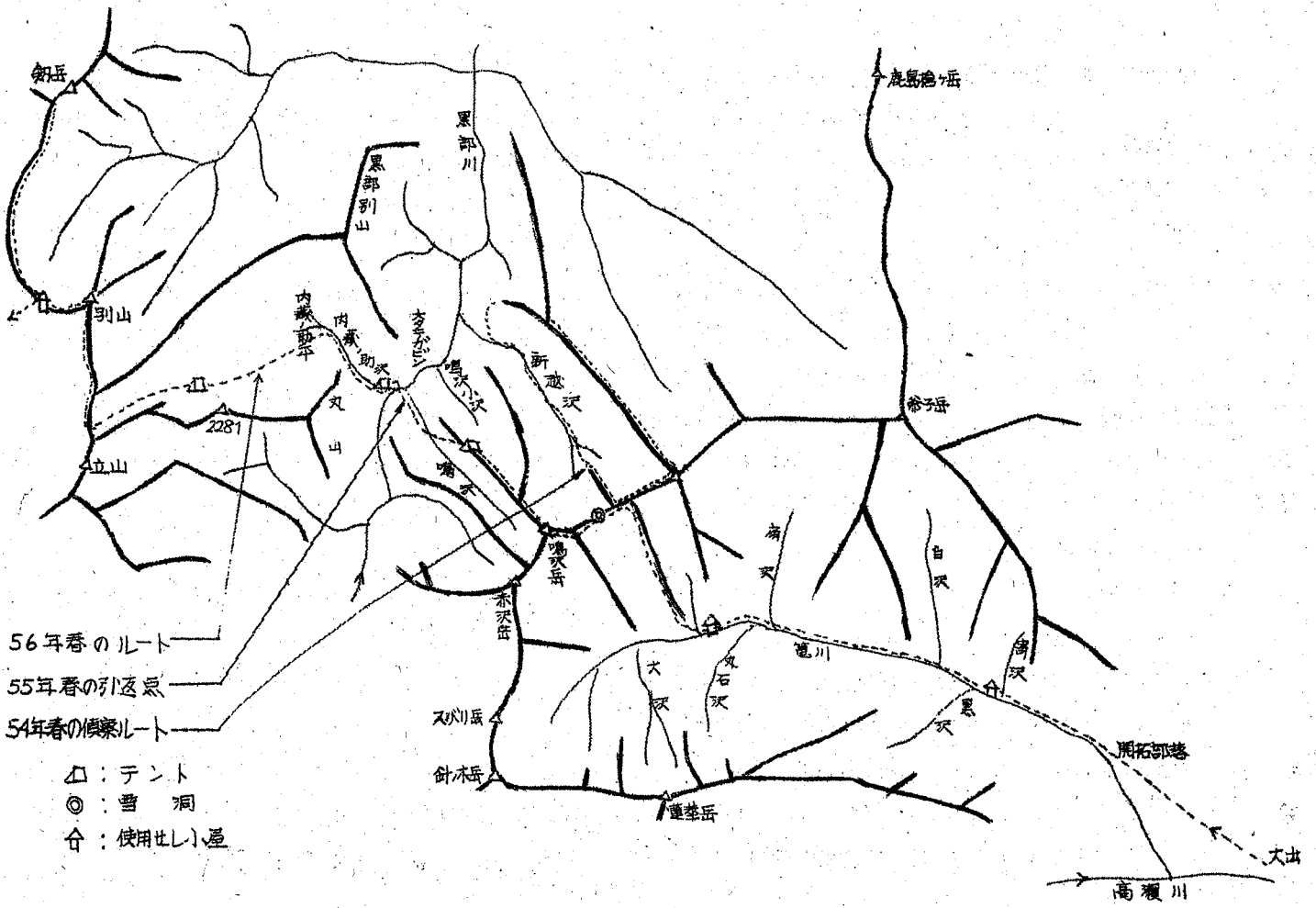
そこで黒部渡渉点（鳴沢出合の吊越）を中心に全ルートをトレースすべく同年秋偵察隊を二パーティ（立山側、宍戸山・佐谷・住吉OB、後立山側

坪井(山)、西川、戸井、田島OB)出し、鳴沢尾根の全貌を知る事に努めた。

こゝで、私達は未知の土地を歩き且つ俱楽することにより部分的に知ることの出来た知識を一つのものに、集成していくのが如何に興味あるものであるかということがわかり出して来た。それとともにもはや既に登り尽された感がないでもない北アルプスに於ても、まだかゝる未知の世界の存在すること驚き且つ喜ぶと同時に、冠松次郎氏、堀田、小原氏など先人の努力に敬意を拂わずにはいられなかった。

五五年

かような状態において五五年春の黒部横断計画(宍戸(CL)、木村(SL)、坪井、西川、山本(進)、三枝、四方、岡田、村瀬、寺田、和田、尾藤OB、東OB)となった。この時は有力メンバーをフルに使えたため、大沢小屋をBHとし、内蔵之助平に最終キャンプを置き、剱をアタックしようという遠大な計画であった。だが、一、二〇〇米という高度にある下廊下の積雪について若干の予備知識に欠ける点がないでもなかった。ただ前年の春新越沢を歩いて見た感じから、ピッケルも、アイゼンも役に立たない湿った重い雪であろうと推測した事は誤りではなかったのだが、同じ位の高度にある篭川谷の新沢出合とか、爾陀ヶ原祢名滝に比べて、三〇〇〇米の山々に囲まれた下廊下は前者に数倍する積雪量のあることは全く予想外のことであった。そのため前年秋に補強工作を行って置いた吊越は滑車が立山側で雪にうまっていたため伸かず、スケールの大きな下廊下にあつては他の渡渉の手段もなく計画は失敗に終ったのである。それに加えて下廊下は積雪は多いにもかゝわらず、気温は矢張り一、二〇〇米並の温かさのため、湿った重い腐った雪は私達に色々と不愉快な思いをさせた。樹間、陽の当る場所、北斜面、ラビー木、ツリーグと雪の性質は千変万化の態度を示し、私達


御岳
別山
立山
2281
丸山
内蔵助平
内蔵助沢
黒部別山
黒部川
カラマツガシラ
鳴沢小沢
鳴沢
新成沢
鳴沢岳
赤沢岳
スバリ岳
針木岳
蓮華岳
鹿島槍ヶ岳
爺ヶ岳
南沢
白沢
竜川
大沢
丸石沢
黒沢
開拓部落
大出
高瀬川
56年春のルート
55年春の引返点
54年春の偵察ルート
：テント
：雪洞
：使用せし小屋

は片時もそれに注意を拂わずにはいられない。更には雪崩とシュルンドの間から見られる怒涛に気を配らなければならない。換言すれば、岩と水の稜線と同様に、いやそれ以上の精神の集中を必要とするのである。即ちかゝる積雪期の谷歩きにおてこそ、自然は我々人間にもっともデリケートな神経を要求しているのかも知れない。又、しかしその反面、春の黒部のように、どこを通って帰るにしても三千米の稜線を越えなければならない。いわば井戸の底にあって絶え間ない水の劇音を聞きながらも、それに動じないタフな神経を持ち合せていなければいけないのである。

五六年

下廊下について知るものを知った私達に、五六年春には「成功」という一言がやってくるのである。前年の秋に前回の轍を踏まめよう滑車を後立山側に留置いたのが功を奏したのである。この横断ということにおいて、吊越の状態如何が、成否の鍵を握るといっても全く過言ではないとつくづく思うのである。

この年の春は参加者が少数のため、前回のような往復ということは不可能であり、計画を大幅に縮少し、アタックが鳴沢出合より内蔵之助沢、立山稜線、爾陀ヶ原と走ることになった。

◇ 行動報告

メンバー

アタック隊　(山)宍戸、元、(法)西川元夫、(食)岡田博司

サポート隊 C2 (山)坪井圭之助　山田良平

C1　広瀬　茂 (OB)　大井孝和　一山幸代　田島　汎 (OB)

三月一九日

宍戸、坪井、岡田、山田、大井、一山、大阪発

三月二〇日　（雨）

二十年振りの大雪とかで、開拓部落のはずれ辺りからラッセルがある。寄沢飯場泊り。

三月二一日　（晴）

新越尾根と菊沢のほぼ中間、菅川本谷左岸の台地に関電の小屋が新築された。新越尾根を使うに際し、大沢小屋より万事都合がよいので此處をBHに変更した。

去年大出、大沢間の荷上げに、貴重な五日間というものを浪費したため、今度はこの間だけ人夫を雇うことにした。私達は寄沢から大沢にはいるが、人夫は大出からトレースを偶って追いかけさせることになっている。実ア人夫との打合せのため単身大出へ下る。約束の人夫三名は既に大出にやって来ていた。大町案内人組合の規定で自分の個人装備（二貫）を含めて六貫しか担げないというのを、事情を説明し、十貫ずつ担がせた。やっと荷造りし初めたかと思うと、今度はこの荷物では関電小屋まで三日の行程だといい出す。止むなく日が暮れたら途中にデポし、荷を軽くして、関電小屋にはいるという線で納得させる。一人の人夫においては力メラを肩にかけ、一体何をやりに来たのかと詰問したくなる。白沢に大半の荷物をデポし、六時頃到着した。

三月二二日　（晴）

後発、田島OB、広橋OB、西川・十貫の荷を持って到着。前夜、夜汽車に揺られてきたこと、昨日の人夫のことを考えながら、三人の労をねぎらう。

先発隊は荷物の整理を完了する。

三月二三日（晴）

BH－C_1、荷上げ。C_1は例年雪洞を設営している主稜線の信州側に建設する予定で取りあえずデポする。今春は沢では積雪が極めて多いにもかかわらず、稜線上では鳴沢岳、岩小屋沢岳辺りでは既に夏道が顔を出している。

三月二四日　（雨）　停滞

三月二五日　（雨）　停滞
三月二六日　（雨）　停滞
三月二七日　（晴）
全員C_1にはいる。雪の少いため九名はいる雪洞を作るのはいさゝか難渋する。いつもやる阪大方式をやめて、斜面と平行にトンネル式の雪洞を苦心して作る。少々時間がかゝつたが快適なのが出来た。
三月二八日　（晴）
雲海の上に針の木、蓮華が朝日にかがやいている。一面の雲海が少しずつ薄らいで先ず大沢が見え、次いで篭川が大町へと姿を露してくる。出発する日には雪で覆れていた大町が黒く見える。朝飯が一條の煙がたなびいている。更に遠くは四阿（スマヤ）、根子、浅間、八ヶ岳、富士山が雲の絨毯の上に頭を出している。カシヤ、カシヤとシャッターの音を響かせて見る。
黒部はと見ると内蔵之助平、丸山、黒部別山、劔と昨年のまゝに、白と黒の縞模様を巡らして静まり返っている。アタック隊とC_2隊はC_2にはいり、C_1隊の田島OB、大井がサポートしてくれる。一山はC_1、C_2間は鳴沢岳を越える悪場のある上、昨年よりテント間隔を延した所でもあるし、帰りに時間を喰い、悪場を越える前に、日が暮れた時のことなどを考え、キーパーをさせる。この様な快晴に一人雪洞にいるのはさぞ退屈でたまらないだろうが、彼女なりに能力に應じて山の味を満喫してくれゝば幸いである。
三月二十九日　（雨）
C_2　停滞
C_1　停滞
田島OBは会社の休暇がなくなるので単身大町に下山。
三月三〇日　（曇一時雨）
C_2のテント場は、南は針葉樹の大木に囲れているが、北は断崖をなして鳴沢小沢に落ち込み、左手から鹿島槍を始めとして後立山の遠望が出来るすこぶる見晴しの良い處である。西はと言

うと剱は樹の影で残念ながら見えないが黒部別山と、その正面に別山沢を懐き、その下には下廊下の心臓部が続いている。こゝに昨年は二ヵ所のスノー・ブリッジがかゝっていたが、今年はすっかり埋ってこゝでも大雪の年だということがはっきりと理解させられる。しかし空はと仰げば乳色を呈し、それが鹿島槍のあたりから次第に稜線に融け込んで、山と空の境界が不鮮明になってくる。という、あまりはかばかしくない空模様である。西の空がいくらか明るいのに望みをかけて出発する。

アタック隊は個人装備、サポートの三名は、アタック七日分の食糧装備をもって、一人平均三～四貫の至って軽い荷で鳴沢尾根を下降する。やがて私達は前衛峯道のオブジェにでもなりそうな白骨樹をメルクマールに左折し、鳴沢右岸の急斜面へとルートをとっていく。例の湿った雪と岩、その間に永年の間に累積して出来た腐蝕土がはさまって、この差者が何の関連もなく混在しているこの斜面は昨年同様私達に苦渋を与える場所である。ザイルフィックスをして、雪の上にはステップを切って一歩一歩慎重に下るが、そのステップも腐れ雪のためバカでかいのを作らないと物の役にたたない。馬蹄状の岩壁の上を右にニピッチトラバースすると、この斜面から徐々に確定し、次第に大きな尾根をなす私達が末端尾根と呼ぶ尾根の起始部に到達する。

こゝには一昨年秋の偵察隊のつけた大きな鉈目が残っていたので、地点の確認に役立った。ここからはザイルの助けもはなれ鳴沢へ一目散に降れればよい。

午後一時、又一年振りに鳴沢出合にやって来た。対岸はと眺めれば水面から永雪の壁がオーバーハング状に切り立っている。その高さは三十米もあるだろうか。その壁の上から二・三米のところに私達の頼りとする吊尻のワイヤーが頼そのぞかせている。しかし私達が秋に補強し

た両岸にわたして置いたたぐり綱は見るも無惨に後立側で切断されて奔流の只中に垂れ下つているではないか。だが滑車はちやんと手のとどく所に健在であるのは何よりだ。早速渡河用に用意した補助ザイル（六十米）を出して工学部の西川が技師長となつてさつそく渡河工作にかゝる。

落ちついてもう一度対岸を見ると氷雪の壁の下には雪融けのためか濁流が渦を巻いて流れている。昨年は印象的だつた雪帽子をかぶつた流れの中央の岩も、ザイル・フイツクスをして水汲みにさえ、降りられた河原もすつかり濁流にかくされている。更には氷雪の壁に黒くべつとりと印されている土砂の具合から一時の物凄い増水が推察され、ただ〳〵自然の威力の大きなことと、その壮観さを想像して今更ながら驚くばかりである。

一時半、トップの坪井が十の瞳と一ケのレンズの注視のもとに滑車をたぐつていく。立山側がやゝ低くなつているので思つたより楽に進んでいく。六十米の補助ザイルの延び切つた時に思わず両岸から万歳の声があがる。私達の仲間にしかわからないこの感激のシーンを記念すべく折りから降り出した雨にカメラのぬれ易のもかまわず何回も〳〵もシヤッターをきつた。吊越は小さな滑車とそれに吊り下げられたブランコの腰掛を連想するような粗末な止り木から出来ている。それに身を委ねて急流の上を渡るのは決して心持良いものではないが、一人ずつ、それからリユックを一個〳〵と渡し、三時、私達は濁流をはさんで東と西に別れた。

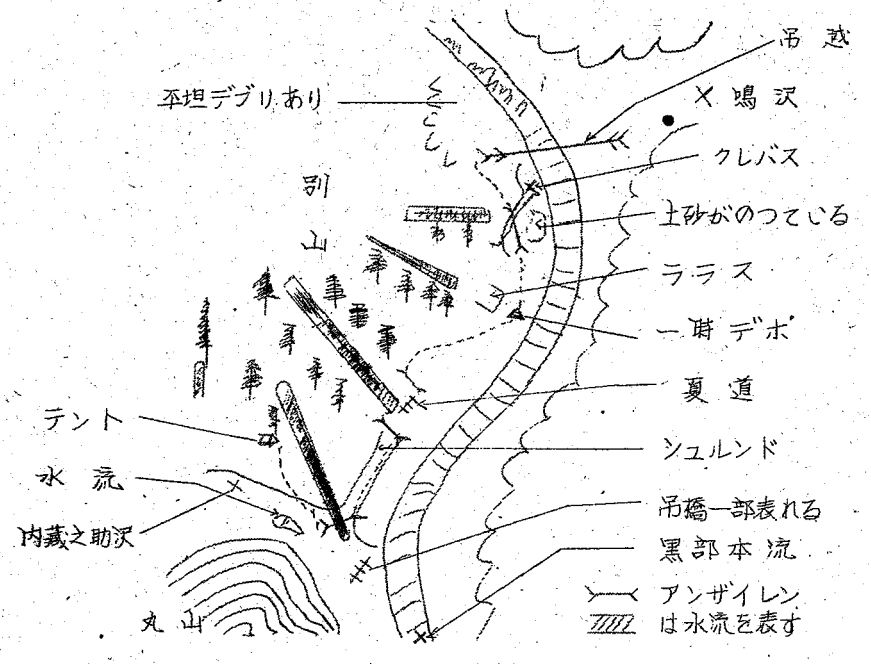
《以後アタック隊の記録》

数に降り出した雨にずく〳〵に濡れたアタック三名は吊越地点を後にした。濁流から灰色の空に吸い込まれている鳴沢の壁が、鳴沢の右岸から下流へとつゞき、本流の左に転ずるに沿つて折れ込んで視界から去つていく。右手は黒々とした赤沢の壁が根元に雪を蓄え、それが堤に

なって立山側と同じように濁流につづく。そしてこの壁は鳴沢右岸へと移っていく。ここには赤沢尾根に鳴沢から登る僅かな、しかも唯一の可能性がある所のように思われるが、実際に取りついたら例の不安定な雪にさぞ悩まされることだろう。

私達は、本流左岸の雪の急傾面を内蔵之助沢の出合を目指してトラバースを開始した。雨のためか、気温の高いためか、恐らくその両方のためだろう雪は水をたっぷり含んだ腐れ雪で、ピッケルを根元まで突きさし、脚を前に出すと、足頸と膝の中間位までもぐって、それでどうやら安心出来る足場になる。それを待って反対側の脚を出して同じ動作を繰り返していくわけだが、下が切り立った堤であり、その又下は折りからの雨で水かさを増した黒部であれば、いやでも慎重にしないわけにはいかない。若しスリップすれば遥か下流の仙人ダムで水死体として発見されるのがオチなのだから。それでも上部がすぐ針葉樹の森林帯でもあり、デブリが余り出ていないのが、せめてもの慰めであった。鳴沢の出合から一転した所で一坪あまりの平坦な場所を見付け少憩。ここにリュックを置き空身でルートの偵察、その結果、部分的に出ている夏道を発見し、例のいやな雪面から草付きを倒木に沿ってアンザイレンして取りつく（半ピッチ）、更に一ピッチ同様な傾面を降り、今度はシュルンドの中を進んだ（アンザイル）。この辺りから日が暮れ、一層行動に困難の度が増して来た。

しかし、私達はどうしても出合に行かねばならなかった。かゝる雨で融けたり、くずれたりする雪の斜面は一時間でも通るのが遅ければ遅いだけ通りにくくなるので一刻も早く通り抜けるのが賢明な策であると思ったからだ。最後に濁流に突き出た岩壁を、西川の電灯に導かれてトラバース（一ピッチ）。ようやくにして七時出合についた。



夏ならば接道と河原を通つてたつた三十分ばかりの行程を正味三時間もかかつてしまつた。雨は止んだがずくぐに濡れた私達は、ふるえながら、不二家のソフトドーナツを食べた。油で揚げたドーナツはかさくもせず、つめたくもなく、おいしい筈であるが三つも食べるとも う食べる気がしなくなつた。内蔵之助沢の左岸を少し登り森林帯の最下端の一かかえもあるような針葉樹の根元をならしてテントをはつた。急斜面ではあるが森林帯である上に積雪は案外少いし、その上用心に大木の根元を選んだので雪崩には絶対安全である場所ではあるが、やはり気分的に快適なテント場というものではなかつた。

それでもラジュウスが快調な音をたてて湯がわく頃にはすつかり元気も回復し、胃袋が満足する頃には既に夜中の一時になつていた。

三月三十一日（晴）

昨夜は夜半になつてもクラストせず　元気な

一向に冴えないので明日は予定の待滞とばかりぐっすり寝込み、起きた時は既に十時をまわっていた。

大阪での計画では雪崩を避けるため内蔵之助沢は昼間は歩かず、快晴の日の夕方から行動をおこすことになっていた。しかし実際には肖の口にはまだクラストせず、むしろ明け方から午前九時頃までに通過するのがもっとも安全であるように思われるので、それに沿って計画を変更した。

昨年も、今年も鳴沢尾根を行動中に毎日幾度となく雪崩れていた丸山の大岩壁が、一日中ずっと静まりかえっている。もはや今年は雪崩の大きなのは出尽したようだ。しかし丸山から出ているデブリは扇状に拡がって石斧を埋め尽し行動中に見舞れたら絶対に避けられそうにない。夏道は右斧即ちこのデブリの下にあるのだが、こゝはかなりはっきりした台地を形成している。夏歩いたときにはブッシュに邪魔されてよくわからなかった地形も、今眼前にしっかと焼きつけられる。デブリは扇の要に近い方で直角に横切った方が安全だし、それに第一沢通しより楽そうなので結局ほゞ夏道通りつまり台地の上を通ることに決めた。岡田が朝食用にコーヒーをテルモスにつめるのを待って午後四時就寝した。

四月一日（曇のち雪）

案の定、一時間寝坊したが、シラーフから頭だけ出してするコーヒーとクラッカーの食事は意外に早く時間をかせぎ午前四時に出発出来た。歩いている間に東の方新越東越の方から空が白み出して来た。今や所をかえて後立の稜線を眺めているわけだが、山肌は樹木が一面に出ていて、雪山のすばらしさが少しもない。篭川谷から見るとまとまった美しさを見せる鳴沢岳も平面的でいささかがっかりする。ただ赤沢が福の耳を中心に所々雪のついた岩肌を見せて周囲を圧している。しかしクラノスケ谷というところは案に相違して実に明るい谷だ。もしこれで雪

崩という危険を考えないでよいとしたら私達を文句なく有頂天にさせてしまつていたに違いない。兼ねてから問題だつた内藏之助平入口の滝も九分通り埋つていて簡単に通過し得た。もし積雪が少くて出ていたにしろ右岸にルートをとれば容易に通過出来ると信じる。夏本流から梯子段乘越への分れ道の辺りで小休止。出合からたつた一時間四十分で来てしまつた。余りあつけないのでびつくりする。流れが顔を出しているので水を汲んで飲む。〝うまい〟。平の中央部のこのあたりは針葉樹、岳樺があり、どこをむいても雪崩の危険は全然考えられないが、特に丸山よりがテント設営には快適に思われた。晴れていれば朝日がさし染め、雪面がギラギラと輝いて絶好の景色を展開させるだろうにどんより曇つた空はは望むべくもない。それどころか真砂、立山の稜線から空模様があやしくなつて来て、七時遂に風と共に雪が降り出して来た。稜線は時々すごい風の音をさせ吹雪いているようだし、幕営することに決めた。丸山の西二、二八一の三角点から出ている尾根をまわつた所、三田平を小高くしたような台地の上である。

四月二日　（快晴）

吹雪の割に気温が高くテントの中はすつかり水びたしになつてしまつた。こんな時にはナイロンテントほどみじめなものはない。つめたいシラーフの中でこの朝ほど待ち遠しがつた朝はない。しかしお蔭で待望の朝日に輝くクラノスケと後立を見ることが出来た。飽かず眺めては時折シャツターを切つて三人共なかなか出発する気にはならなかつた。梯子段乘越を通らないで、直接内藏之助源頭のカールをつめ二時半稜線に立つ。稜線間近かで鹿島槍を眺めながらラジウスで沸かした茶の味は何とも忘れがたい。稜線は風こそ強いが爾陀ヶ原には天狗から室堂、一越と一筋のシュプールが出て、スキーヤーたちが春スキーを楽んでいるらしい。別山乘越には川島先輩が三人を待つていた。思いがけなか

つたことなのでびつくりする。当然のことではあるが夜遅くまで四方山話に花が咲いた。小屋の尾根に吹きつける風の音を子守歌に乾いた蒲団はあるし、すばらしい睡眠をむさぼることが出来た。後は彌陀ヶ原を一目散に下ればよいのだ。

1956年度 冬山報告

その一　北岳
その二　八方尾根
その三　富士山

北岳バットレス

一九五五年の夏、我々は北岳大樺沢に合宿、バットレスに遊んだ。その冬引続きバットレスをやれとの声もあつたが、この計画は実施されるに至らなかつた。そして北アルプスの双六をベースとして計画を展開しようとしたが、天候が我に味方せず、大自然の猛威の前に我々の無力を嘆く他なかつたのである。この新しい考え方による山行も当初の計画は完遂こそされなかつたが、後に続く者に数多くの課題を残して春を迎えた。

南アルプスの冬の好天を慕つてか、数年来続けられて来た雪の黒部下廊下の井戸の底の様な重圧の下での登高が達せられた反動としてか部内には部が生れて以来伏流として流れて来た冬の北岳バットレスという問題が話題にのぼり出した。とにかく玄大な大空の下、三千米の高さで、岩と雪と氷を相手にと云う事は我々にこの上ない魅力として仇きかけた。

夏山の報告会も済んだ九月八日のリーダー会

に於てはアプローチルートとして釣尾根を使うことなど行動計画の大項が決められ、細目に関しては、偵察の結果及び文献研究に依って決めることになった。

秋も深まり山はとっくに白化粧した十月二十八日から一週間バットレスの偵察、池山小舎への荷上を目的として一パーティを選り、夏に踏まなかったEガリ↓第四尾根↓Cガリのトラバースルートをつけ、BHとする池山小舎へは米30kg、クラッカー85kgが荷上げされ、多量の薪が取り入れられた。

この間にも東京聖峰会から丁重なる御教示の一文をいただいたり、雑誌ケルンの小谷部氏の記録や関西学連報告などの文献などにもより計画は着々と出来上り、後々は冬を待つのみと成った。

参加人員は二年部員以上十四名が予定されていたが、合宿直前になって流行性感冒に罹病するもの多く、最終的には五名となりその外、OB二名）先発の五名は二十三日篠田先生や先輩方に送られて大阪をあとにした。

メンバー

西川元夫（CL）　村瀬泰弘（SL）
樋下重芳（装備）　山田良平（食糧）
大井孝和（記録）　広橋茂（OB）
関本靖裕（OB）

合宿中の天候

12月24日　晴、トンネル出口から見た北岳にはガスがかかっていた。
〃　25日　晴、午前中稜線は依然ガス
26日　快晴、稜線は強風
27日　快晴、弱風、15時頃一時巻雲拡がるも日没後再び快晴、風が吹き出す。太平洋側は終日雲海。
〃　28日　午前中快晴、太平洋側雲海、午後黄色の空となり、15時頃一時雨。
29日　2時より四時まで降雪、その後雪

節風猛烈に強くなり快晴となる。

12月30日　快晴、夜半より降雪

〃　31日　午前中晴　太平洋は雲海。午後よりガス。

1月1日　晴、午後巻雲出る。

〃　2日　高層雲の曇り　19時より降雪

〃　3日　晴、巻雲

行動概略

24日

身延線の一番で甲府着7時45分。自動車の交渉に手間取り甲府通運の大型トラック一台をチャーターして9時45分駅前より荷物諸共乗込む。市内はシートをかぶったまま通過、町はずれまで来てもう出てもよいとの合図で全員顔を出すと富士が直南に我々の壮途を祝福するが如く仰がれる。第二のトンネルを出て登山の道の分れる所で自動車を降り昼食。予想していた雪は全くなく拍子はずれだ。點差で一橋大隊の撤収して来たのに出遇い、荒川小舎には国学院大学が下って来ていた。上では10日間以上悪天候が続いていたらしい。

甲府駅（〇九四五）→夜叉神隧道（一一一〇〜一二〇〇）→點差（一三三〇）→釣橋（一五〇〇）→荒川小舎（一六〇〇）

25日

延泊5時、7時出発。各自40kgの荷にあえぎながらもよく頑張って急坂を登り切る。坂の氷には滑って消耗した。下ったパーティのラッセルが使えて大いに助かり昼過ぎに池上小舎に着く。池はきれいな雪原となっている。秋につくった薪もかなり残っていた。15時より西川・村瀬・樋下の三人が荷上に向う。二五〇〇位迄登ってデポし電灯の灯で小屋に帰る。

荒川小舎（〇七〇〇）→急坂上（一一四五）→池山小舎（一二五〇）

→池山小舎（一五〇〇）→デポ地（一七〇〇）→池山小舎（一八〇〇）

26日

天氣良く9時出発・南特有の森林中の登高が続く。寒さがひしひしと身にこたえる・梢を轟々とならしている風も時々は木々の根元を吹き抜けて粉雪を舞い上らせ我々をちぢみ上らせる。森林限界をはずれると風が物凄じ・砂礫の上に立つと急に視界いっぱい飛込んでくるバットレス・満々と粉雪を蔵したガリー群・氷と雪をまとった岩の黒い横じまの形相・思わずファイトがみなぎってくる・釣尾根ではさんざん雪煙に叩かれた。

キャンプ地は二九五〇のピーク直下の台地でテントは南北に一列に設営する・

後発の玄橋、山田は荒川小舎に入る、

本隊

池山附（〇九〇〇）↓デポ地（一一〇〇）↓砂礫の頭（一三〇〇）↓二九五〇のピーク下（一六〇〇）

後発隊

夜叉神（一〇〇〇）↓荒川小舎（一四〇〇）

27日

風もおさまり快晴・気持の悪いほど好天が続く・関本、福下、大井はデポ地からの荷上・西川、村瀬がバットレス取付までの偵察に向う・秋の偵察により、第五尾根のトラバースには、とにかくeガリの力ッオブシへ到達しなければならない・八本歯コル附近の地形は複雑で最初釣尾根を登ってeガリを直接上から下ってみる。ところが少し下ってみるとラッセルが腰まであり・その上積雪が不安定で表層雪崩を起す始末。危うく逃れこのルートを諦めた・この後幾度か釣尾根からeガリに下るルートを試めしてみたが、なかなかこれはと云うのが見付からない・陽も傾き今日はこれまでと釣尾根を下っていくと下にそうなのが眼につく・八本歯のコルから頂上側へ数えて三ッ目のコブから出ている沢だ。とにかく明日のことだとテントへ戻る・頂上側から八本歯コルへの下りに20米のフィックス・

荷上に下つた三人もすぐ近くまで登つて来ていた。日もとっぷり暮れから後発隊の玄橋、山田が到着。これで全員七名となつた。午後巻雲が拡がつていたが、この頃には再び快晴、ふる様な星空の下、釣尾根に三つ並んだテント。風が吹き出す。

偵察隊
AC(一一三〇)→AC(一五三〇)
ボッカ隊
AC(一一〇五〇)→デポ地(一三〇〇—一三五〇)
→AC(一五五〇)
後発隊
荒川小舎(〇七三〇)→池山小舎(一二一五
〜一二四五)→AC(一九一五)

28日

この日も午前中は快晴だつた。アプローチルートの偵察に西川、村瀬、山田、間ノ岳へ関本、樋下、大井、テントキーパーは玄橋。

昨日の沢を先ず20米ばかり下つて左へトラバース。小尾根へ出て雪を落しながら下降とトラバースを繰返す。とうくeがりに下りついてeがりを仰ぐと幸運にもカッオブシの20米下だつた。もう一息と第五尾根のトラバースにかかると、とたんに雪が悪く無情にも岩がピッケルを拒む。秋の赤旗を発見してルートを確認。陽は既に釣尾根の彼方に没し、気温がグンと降るのを覚える。

間ノ岳隊は釣尾根より稜線に上る。稜線は雪が飛び去つて夏道が出ている所もあつた。間ノ岳頂上附近は氷となつていた。風は強く大井は中の岳の先より引返し、他の二人は間ノ岳頂上まで行き北岳の頂上へよつて帰幕する。

この夜、テントの中では間の岳の話にはずむ。ラジオの天気予報は気圧の谷の接近により明日の天気の悪化を報じている。第五尾根のトラバースルートもやっと半分つけただけだし、もう二日晴れてくれればと祈る。天気のくずれないうちに是非とも攻撃を終えたいものと気ばかり

焦る。新雪が降れはトラバースを主とするアプローチの條件が悪くなる。天気予報の外れることを祈って一応明日を第四尾根のアタック日と決め、それがすんでから第二尾根だ。休暇の都合から関本OBと体の不調の大井は明日下ることにする。

偵察隊

AC（一一三〇）↓AC（一五三〇）

間ノ岳隊

AC（〇八二〇）↓稜線（〇九五〇）↓間ノ岳（一三〇〇～一三一五）↓北岳（一五五〇）↓AC（一六四〇）

29日

山田、大井は2時に起きて朝食の準備、4時には出発準備整ったが、その頃より雪が盛んに降り出す。残念乍ら出発は見合さないわけにはいかない。そうと決まると急に寒気が身に泌みて靴をぬいで寝袋にもぐり込む。5時頃からは季節風が烈しくなりテントの支柱を支える鉄棒。夜明けと共に雪は止み快晴となる。しかし大沢から吹上げられる雪のため、テントはみるみる埋っていく。とにかく、こう風が激しくては岩も登れないと諦める。早く済ませた夕食後、『明日こそ！』と朝食のスープをつくりザイルを調べてシュラーフに入る。

下山隊

AC（　　）↓

30日

アタック＝西川、村瀬、サポート＝云橋、樋下、テントキーパー＝山田。

5時30分。釣尾根を辿る四つの懐灯。寒さは厳しいが幸いに風がない。細く鋭い月が東天にかかり背中のあたりの興奮をしずめてくれる。やがて東の水平線は真紅にそまり、富士が黒々とシルエットを現はす。黄金ぶちどられたバラ色のバットレス。サポートのラッセルの後をアタックが続く。

深じていた様に、第五尾根のまだルートをつ

けていなかつた残り半分は雪が悪くて難渋し、dガリに着いた時は10時を廻つていた。こゝからサポートの二人はアンザイレンして引返す。アタックの二人もこゝでアンザイレン。30米ニピッチ下りぎみにdガリをトラバースして左岸にかゝると、こゝは南に面しているので、岩上の雪は極めて不安定。ベルグラに強引にアイゼンをきかせたかと思うとガリッとすべる。そのうえ第四尾根からの小落雪が絶えまない。仰ぐ大逆層の岩は、のしかからんばかりにマッチ箱附近で天に消えている。第四尾根のトラバースはアンダーホールドの二ピッチ半でCガリの滝上へ出た。冬なればこそである。まだ天気は大丈夫。既に11時30分。次にCガリを50米登る。ラッセルに喘ぐ息を静めて、更に第四尾根へつき上げている小ガリを一ピッチつめた。この上半では、雪が不安定に岩に乗っている状態でトップを大いに苦しめる。リッジへ出てマッチ箱の第二コルまでは問題なく、スタカットで順調に登れた。この上のオーバーハングにちよっと手こずり。打ち残してあるピトンにアブミをかけて、グッと上るが手一ぱいの所にある小さいホールドには氷がついていて一度かけてもジワジワと手は滑ってゆき墜ちるのが落であった。その都度、懸命に確保するセカンドは、いやと云うほど頭から雪をかぶせられた。dガリ側へは30糎位の雪庇が出来ていて、リッジは左右華々しく切れ落ちている。一息入れて仰ぐ空にはいつの間にか暗雲が張りつめ、二人を一層不安にする。鈎尾根からの仲間の声に励まされ再び体勢を整え、最後の手段と直登をやめCガリ側をからむことにする。捨縄をピトンに通して、これにぶら下り一つの振子となつて一枚岩を渡るが、雪のためホールドがわからない。アイゼンが「ガリッ」と音をたててすべる。その内に力尽きて戻ってくる。

しかし、遂にホールドを確保することができた。とにかく、この第二コルの通過に一時間も

かかったため、第三コル上の雪壁を明るい中に抜けきることが不可能に思われてきた。第三コルへは懸垂で下ることにして、雪を掘ってピトンを打つ・その中に陽もとっぷり暮れる。第三コルへは十八時・ビバークだと悲壮な決心をして、釣尾根の仲間に発光信号で知らせた。

サポート隊は15時にアタック隊を頂上に迎えるためにACを出たが、途中マッチバコに居る二人を認めて、これでは日のある内に頂上到達は望めないから多分ビバークだろうと判断した。しかし一応17時に頂上にあがり15分ばかりアタックを激励してACに下った。この夜テントに当る風は特に激しく、夜半より雪さえ降る始末で、第四尾根の雪と岩の間で朝を待っている二人のことを思ってまんじりともしない・ビバークの二人はツェルトを打つ風雪におびえながら、明日の天気を願い、時計をにらむ。

アタック

AC（〇五三〇）↓dガリ（一〇四〇）↓Cガリ（一一三〇）↓第二コル（一六三〇）↓三コル（一八〇〇）

サポート

AC（〇五三〇）↓dガリ（一〇四〇～一一〇〇）↓AC（一三一五）

AC（一五〇〇）↓北岳頂上（一七〇〇）↓AC（一八一〇）

31日

雪もやんだらしい・じっと風の音を聞いているのはたまらなく哀しいので、5時になるや否や携燃に火をつけて、暖をとるついでに湯をつくる・つけたままだった電灯も線香の灯のようになった・一時間かかってテルモスに半分できた・風もおさまり静寂のうちにバットレスの夜が明けていく・ツエルト越しに外の雪をさわってみると昨夜の新雪は10糎位で案外少い・陽がさして来ないので恐る〳〵顔を出して見ると、堂々と晴上っているではないか・はるか東の空が陽の光を底えぎっていたのであった。ふり仰

ぐと中央稜が圧倒的だ・7時に行動を再開・こゝから上は夏なら50米ほどつゞくのカンテとなり凸がり側のクラックを登るのだが、今はべッたりと雪のついた壁となつている・こゝの雪の状態が悪ければ極度に困難な所となろうと云う事はACを出る時からの一致した意見であった。幸にも昨夜の降雪が少なかつたため雪は安定していてピッケルが快適にきき、この壁はニピッチで片づけた・さらにもう一段、トップが雪を払いながら岩を登ると、再び雪の斜面へ出る・そして傾斜は徐々に緩るくなり、頂上までキックステップの登行が続いた。

テントの三人も9時に食糧や飲物を持つて頂上に向う・途中、中央稜南面直下をトラバース気味に登つている二人を発見・ほっとする・

ヤッパリ[illegible]冷い西風の頂上で五人が互いに固い握手を交したのは正午であつた・いつの間にかガスが周辺の峰々を包んでいた・

テントへ戻れば、登攀の話に暗くなつたのも忘れる・風もなく、平和な一九五六年を送る・蛍の光の歌声・

アタック

第三コル（〇七〇〇）→頂上（一二〇〇）→AC（一三〇〇）

サポート

AC（〇九〇〇）→頂上（一一三〇〜一二〇〇）→AC（一三〇〇）

1日

元旦の朝も静かに明けた・

村瀬が凍傷にやられているし、他の疲労も回復していないため、昨夜の協議で今回の第二尾根登攀計画を放棄することに決めていたので、久し振りにゆっくり起きた・樋下がテントキーパーで村瀬が休養・玄橋・西川・山田が間ノ岳へ向う・風も穏かで・のんびりと渓流を辿る・

AC（一〇三〇）→間ノ岳（一三四五〜一四一五）→AC（一六三〇）

2日

珍らしく曇っている。予定通り撤収する。例の急坂の下りではさんざん苦しめられた。荒川小舎は超満員・往きにデポしておいた食糧や、こわれたテルモス、それに衣類の包み等全部無くなっていた。少々気分をこわす。

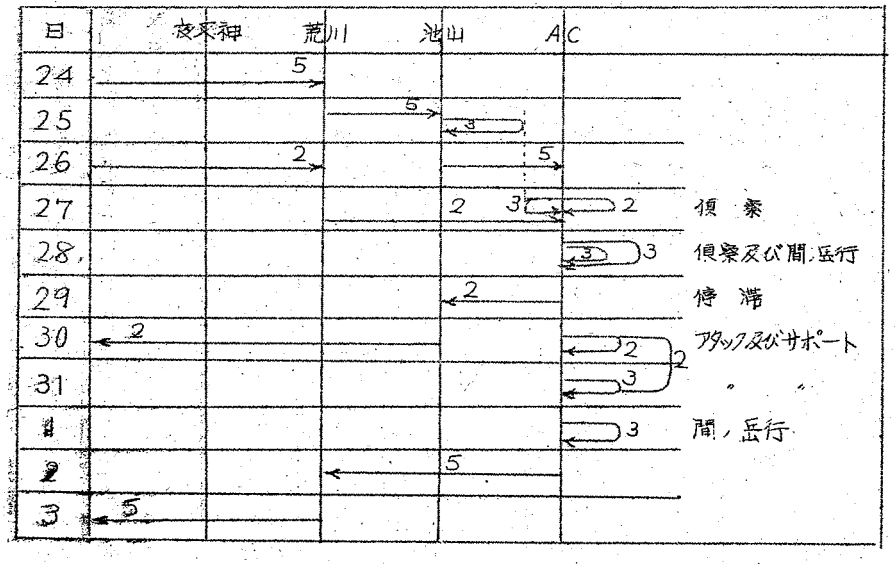
AC地（〇九三〇）→池山小舎（一一三〇〜一三三〇）→荒川小舎（一五四五）

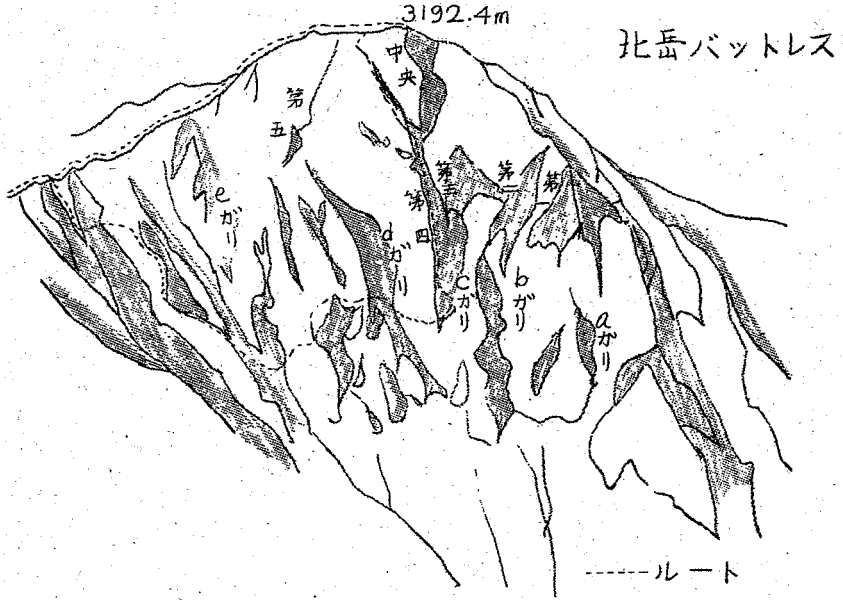
3日

夜叉神トンネルからふり返えると、昨日までの山々は白銀に輝き、真青な空に真白な雪煙を吹き込んでいた。

荒川小舎（〇九四五）→鮎差（一一三〇→一二〇〇）→トンネル入口（一三五〇）→出口（一四一〇〜一四四五）→芦安（一五四五）。

行動表





〔後記〕

装備、食糧共今回は新しい試みはなかつたが東京製鋼より寄贈されたマニラザイル二本を使用した。ガソリンはラジウス四台に対して四リットル缶四つ、計十六リットル荷上げしたが、二リットルばかり残つた。アタックの常行した用具はザイル30米一本、カラビナ五、ロックハーケン十二、アイスハーケン五、ハンマー二、捨縄三、ピッケル二、アイゼン二、わかん二及びツエルトで、ロックハーケン六、捨縄二を消費した。

今冬は天気に恵まれすぎて何だか物足りない様な気がしたが、愉快に過すことができた。リーダーの未熟なため、アプローチのルートをつけるのに、多くの貴重な時間を費してしまい、とうく第五尾根トラバースのルートの半分を未確認のまゝアタックに移つてしまつた。このため第四尾根でビバークを強いられるという結果になつたのであるが、当時の心境としては、

それ迄幾日が続いた好天に明日、明後日の好天まで期待して、更に一日偵察のために費す気にはなれなかった。

アプローチルートとして今回の第五、第四尾根をトラバースするルートは雪の状態でかなりの緊張の連続だったが時間的にも悪くないルートと考えられ、釣尾根の二九五〇のピークからCガリの第四尾根取付まで二時間半もあれば行けるだろう。だから釣尾根にACを置く場合は第一尾根、第二尾根や中央稜の攻撃にも有力なルートとなろう。一般に積雪期のバットレス、アプローチ・ルートとしては大樺沢又は釣尾根にベースを置いてバットレス沢→Uガリ→中央バンドのいわゆる夏のルート・掠奪帯から直接Cガリ又はUガリの雪壁又は氷壁を登って中央バンドに登るルート等が挙げられている。

何れにしても北岳バットレスの様にAC迄もACからもアプローチの長い所で奇襲攻撃を行うとするには、それに備えての体力の消耗を防ぐことが肝要であることを痛感した。

今冬は出発直前になって流行性感冒に罹って参加を辞退する者多く最終的には半数となった。このため装備、食糧の準備に相当混乱が予想されたが、責任者の懸命の努力によって支障一つなく、満足に山行を終らしめてくれた。又ボッカにおいても順調すぎる位順調に進み、これらの点においても、今回の山行は計画は大幅に縮少され、やはり数々の反省は尽きないが一応の目的を達したものであったと考える。

最後に、終始有益なる御討論、御示唆、御援助を与えられた篠田教授、諸先輩方に厚く謝意を表する。

春山合宿

《1956年》

鳥帽子小屋から黒部上廊下偵察（失敗）

一九五七・三・二四～四・四

参加者

J.3　岡田博司　チーフ・リーダー　食糧AC隊
M.6　宍戸　元　医業・写真　AC隊
M.2　乾　正　装備　AC隊
T.1　山本信樹　食糧　サポート
T.1　兼清喜雄　食糧　サポート　時間記録
E.1　野田憲一郎　食糧　サポート
P.3　森川和子　装備　サポート
L.3　一山幸代　装備　サポート

計画の決定するまでの経過

1.　三月に入ってCL西川は卒業実験が多忙で、本合宿に参加しない事が決った。来年度のCLは未だ決定されなかったが、それはさて措き、今回は岡田が代ってしをやることにして、村瀬、四方等と力を合せて合宿の計画、準備、実施を引き受けることになった。それ故、岡田は先ずメンバー十五名程度を考え、計画の概要を建てんとした。

だが、村瀬は見学旅行を抜けられないので、合宿参加を中止し、全計画から手を引く事になった。ともあれ、上級部員、岡田、宍戸、四方樋下、二年部員山田、飯田、乾、渡辺等の参加を見込んで計画を進める事にした。

2.　阪大山岳部は今後、黒部源流の山々や黒部上廊下をやらなくてはならないと云う気持は可成り確定的なものであり、今春は先ず、黒部上廊下横断の為の偵察を主目標とする山行をやろうとそれが部の現状から考えて最も適当な事と考えられた。

ところで、右記のメンバーからすれば、いだずらに大人数でするよりも二パーティに分れて一つは鳥帽子ヶ原から五色を越えてスゴ小屋に入

り越中側からの偵察、一つは烏帽子から赤牛に至り信州側から偵察と云うことが考えられた。（後から考えれば右記の部員が全部揃っていたとしても果して可能であったか疑わしい。）だが上級部員が揃わないならば烏帽子から一本で行こう。そうなればテント二つを出して赤牛岳を越えて黒部上流下の核心を目指して下降し得る可能性がある。又烏帽子岳から東沢にテントを出すのも良いであろうと考えられた。

この間参考にした文献は、三高報告、立教報告、黒部（晃）、DAC報告等であった。

3. 三月も中旬となった。四方は風邪がこじれて合宿は不参加になるであろうと表明した。宍戸、山田、飯田、渡辺は在阪しない。ここに至って唯一の事は彼等の連絡を待つことであった。各係は在阪者をもって構成したが、メンバー確定しない以上準備は概括的な事以外手のつけようがなかった。

全員と連絡がとれたのは三月二十日頃であった。

樋下は風邪、山田も風邪、そして飯田、渡辺もそれぞれ合宿不参加を表明した。そしてここにメンバーが確定したが、雪山経験者は二名、新人四名と云うのがその内容であった。三月も下旬になった。私達には代る計画がなかった。ともあれ、少規模ながら従来の計画でなんとかやれるであろう。そしてそうする以外に仕方がないという気持であった。

（計　画）

大町ー葛温泉ー濁小屋ー（スナダチ尾根）ー烏帽子小屋

バスが何處まで入るか明らかでなかったが、実働四日あれば烏帽子小屋に達し得る。新人及び女子部員は烏帽子小屋に二、三日滞在して下山させ、残る三名のみで東沢東越にテントを進め赤牛岳を往復する。六日あれば充分であろう。日が許せば東沢へも下ってみたい。だが、宍戸は六日にはどうしても帰阪しなければならない。

〔食　糧〕

入数が不確定な以上、行動計画も不確定である。それ故、短時日に計画を建て、員付、梱包を為すにはどうしても経験者がこれに当らねばならないから、L自らこの任を引受ける。

あらかじめの献立表をつくり人数の都合で適宜にこれを加減する。餅の使用は前以って依頼することも出来ないので取止め、濁まずは米、稜線上ではパン一本で行く。昼食はクラッカー。荷物の様子を見て、昼食にみかんの缶詰を使用した。

〔装　備〕

幕営具はナイロン二号テントのみで至極簡単であった。テントは可成り沢山損傷があり、森川襲が修理に当ったが、もっと丁寧にやってもらいたかった。

個人装備一般にアイゼンの手入が悪い。上級部員でもツアッケの丸くなったアイゼンを持ってくるようでは困る。

〔方　式〕

なんと言ってもメンバーの内容が充分な隊員配置を許さない。時間的制約があり、スムースに荷上げを完了するためには、全員を長く稜線上におく余裕がない。それ故、今度の様な非常識とも云える方式を採ることになった。即ち、B.Hに隊員を残すことなくA.Cを進める事は危険である。又、新人、女子部員のみで下山させる事も問題がある。

メンバーが良ければ、かような問題が起りはしないが、かかるメンバーであればそれに適した山行があり、方式があるのだ。私達はあまり黒部上廊下に固執し過ぎていると云う事が、客観的に見て云えるのではあるまいか。

〔記　録〕　　岡田記

3月23日

18・45　大阪発（遅発）

多数の見送りをうけて全員八名、夜の大阪を発つ。

〔行動表〕

予定行動表　（仮案）

	鶴小屋	三角矣	鳥帽子	東沢東越	赤牛
1	8 →				
2	8 ⟷				
3	8 →		→		
4		⟷ 3	→		
5	←	5	3 →		
6				2 ⟷	
7			←	3	
8	←	3			

行動表

1957	葛温泉	鶴小屋	取付矣	三角矣	鳥帽子	野口五郎	東沢東越	赤牛
3.24	8 →	→						
25		←	←					
26		停						
27		8 ⟷						
28		8		→				
29	←			3 ⟷ 5	→			
30					3 →			
31					停			
4.1					停			
2					停			
3					←	3		
4	←	←		1 ⟷ 2				

3月24日　小雪のち曇

8・05　大町発（バス）

9・05　葛温泉着　河虎荘にて荷物を配分、全荷六十八貫

10・20　葛温泉発

11・32 S 12・25　昼食

15・20　濁小屋着

20・00　就床

兵戸、大町で仕事があるために遅れて出発、荷を残して七名で行く。バスはやっと葛温泉まで入る様になったらしいが、雪は非常に多い。濁沢の小屋は一部屋だけが可成り良く、風もあまり入らない。

3月25日　薄曇一時小雪

5・30　起床

9・00　小屋発

10・00　ブナタチ尾根取付点

14・30　兵戸、岡田トラバースより上へ偵察に行く。他は小屋へ帰る。

15・20　小屋着（乾、山本、野田、兼清、森川、一山）

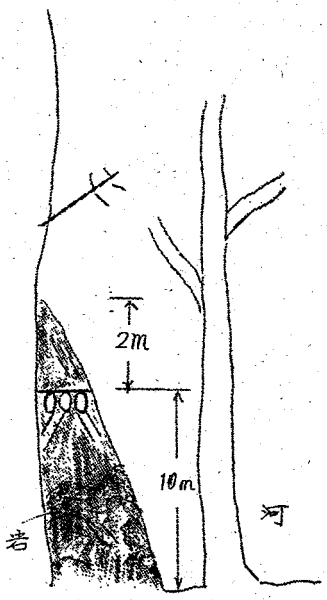
17・00　兵戸、岡田帰着

20・00　就床

三角点へ共同装備、食糧を荷上げすべく出発する。これまでかけた橋で右岸にわたり二〇〇米程で取付点に達する。赤布が木についていて、ようやく判明したが、取付点のトラバースが非常に雪のつき方が悪い。空身でトラバースルートにラッセルをつけて見るが、可成り困難な様子なので他にルートを探す。しかし見つからず、結局夏道通りのトラバースをする以外に方法はない。

取付点に雪洞を掘り荷物を入れ、七名を帰らし、岡田、兵戸でナイロンザイルをフイックスし、上部をラッセルを兼ねて偵察し、悪場のないことを確めて帰る。

この様な状態が登り気味に40米ばかり続いている。



年によってはこの時期では木の枝道が露出し切っていることもある。（例：京大　鳥帽子↓剱、（三～四）

3月26日　吹雪

全員停滞

河原の雪を巻きあげて風が吹く。薪作りをする。

三月二十七日　快晴

6・00　起床

8・00　出発

8・40　デポ着

9・35　デポ発

11・40　昼食

14・45　二二〇〇米三角点デポ

15・30　出発・下山

17・25　小屋着

21・00　就床

荷は軽く、雪はかなりしまっていてラッセルは比較的楽である。しかし三角点まで急傾斜の部分は幾つかあり、慎重にラッセルして行く。森林帯で雪崩の危険はまずないと見た。

三月二十八日　晴　上部でガスが出る。

6・00　起床

8・40　出発（第一隊）

9・00　出発（第二隊）不必要品を東電小屋にあずけ後片付け。

11・40　昼食　前日より高所

12・00　出発

13・00　デポート　荷の一部を加える

13・35　発

15・55　鳥帽子小屋着

20・30　就床

[illegible]地より上部にも急斜面や細くやせたナイフリッジ・不安定なトラバースがある（昨年、同大スリップ事故ありと聞く。）

鳥帽子小屋は少し雪が入っていたが、先に入ったパーティがあると見え居住性良好、丹念に除雪し、ゴザ及びふとんを使用し快適なり。

三月二十九日　快晴　風なし

5・30　起床　　9・50　出発
10・35　鳥帽子岳　　10・45　発
11・05　鳥帽子小屋　　11・20　下山出発
12・10　[illegible]昼食　　13・00　下山隊出発
14・10　トラバース上部　　14・40　トラバース下部
15・10〜16・08　濁小屋
18・30　葛温泉　　20・20　タクシーで大町へ
21・00　大町着　　22・17　大町発
13・30　荷上げ出発　15・40　鳥帽子小屋着

サポート隊の山での生活はこれで終りである。全員で鳥帽子岳へのぼり、後下山せしめる。

岡田、宍戸、乾は荷を小屋に上げる。明日の天候は疑わしい。

三月三十日　曇・烈風

9・00　小屋発
14・00　野口五郎岳頂上
16・00　テント設営終り、テント内に落着く。

一方下山隊は、9・37　京都着

ちょっと出発を考えさせられる様な天気であったが、東沢のむこうに見える赤牛岳の姿に励まされて出発する。

歩き出しは可成り不安だった。おそらく行動出来るギリぐの天候であろう。岡田、乾、宍戸の順でちょっとした重荷にあえぎながら、雪と岩のコンビネーションを時にはもぐりつつ、時には風に吹き飛ばされそうになりながら三ッ岳を越えた。小さなピークを幾つか越して野口五郎頂上に達したが、あたり一面を急速に動くガスにまかれ今は黒岳も見えない。東沢乗越迄と思ったが、こう風が強くてはコルの状態如何

でテント設営も困難であろうと考え、頂上附近に設営する事に決める。頂上より五十米手前の凹地にテントを張るが、あたりはシユカブラが発達し風の強く当ることを裏付けているが仕方ない。有名な東沢から吹き上げてくる風の強さは百も承知であつた。

三月三十一日　風雪

停滞

昨夜から猛烈な風が吹いた。テントが今にも破れそうにはためいていた。最悪の事態を考えると不安であつたが、陽気な話題で気分をまぎらわせた。テントが雪で少しうまつた。N2号テントは側面から雪に押しつけられると三人は少し窮屈すぎる。

四月一日　風雪

風も雪も間断なく止まない。ラジユウスをたくと、蒸気がテント内部につき、風であおられたあちこちシユラーフの上に積る。オーバシユラーフもシユラーフも凍つてバリバリである。非常に温度が低いらしい。日暮の時刻になると、悲惨な気分が胸に滲み込んでくる様でたまらない。紛失したナイフで乾のエアーマットに穴があく。三名とも熱がある。そして身動きもせずテントに閉じ込もつていると体の調子が不安である。それでも明日天気になれば、更にテントを進めるべきか、或は又、行けるところまで往復してくるか、等考えてみる。

四月二日　風雪

朝薄陽が差している様に思つたが相変らずの天気である。もう一日の辛抱だろうと自らなぐさめてみる。外に出て見て少し動くも息切れがして苦しい。熱はあまり無いようだが少しうんざりして来た。明日が快晴なら別だが、もう鳥帽子小屋に帰りたいと思う。誰の気持も同じだろう。食糧もそんなりゆとりがない。日に制限もある。それよりも第一に、こんな惨めな気持をいつわりの虚飾で美化しようと云う気にはなれない。山に敗け自分に敗けたのだ。再出発だ。

四月三日　ガス　烈風

11・00　出発

14・00　鳥帽子小屋着

日はささない・だがガスの間から槍や遠くの山が見える・テント地よさらばだ・

手袋をぬらして使い物にならないので靴下を手にはめる・しかし風が通って凍えそうだ・三ツ岳への登りで殆んどバテかけた・腹が減ってたまらぬので干ぶどうをほおばる・三ツ岳からは元気を持ちなおして烈風にあおられながら小屋に辿りつく・テントで殆んど水を飲んでいない・コッヘルに半分ほど一気に水を飲む・

四月四日　快晴

11・00　小屋発　　14・00　濁河原

14・40　濁小屋発

15・00　宍戸、乾、葛よりバスで大町へ↓

細野

15・30　岡田、葛温泉着　ここでとまる・

赤牛岳が素晴しく美しい・遥か遠くの黒岳からずっと手前にのびて来ているその尾根を見て馬鹿にしていやがると思った・先日まで一生懸命反対の方向に向って歩いていたのだから・東沢へ真直下り、赤牛からの尾根にとりつけばすぐそこだと云う気がする・（これは可成り確実な気持である。）

宍戸、乾は細野に寄りたいと言うので濁から少し歩いてから別れ、一人のんびりと風景を楽しみながら下る・

凍りつく様な厳しい生活も
今は淡い夢の如く身内に潜み
燃えたつ歓喜と希望だけが
次に来る日々に輝きを与える

Spring has come.

高原の谷間にも遅い春が訪れて
雪解みがそる水々とさえずる小鳥達にも
新しい太陽が眩しい程だ
いざ、目覚めよ。そして希望せよ！

「マナスル通信」

山岳会の諸兄へ

〜サマ・ベースキャンプより〜

徳永篤司

夜半に、ふと目覚めてテントの外へ出て見ますと、東尾根の上に半弦の月が懸り月影に、凍りついたプラトーの稜線が、恐ろしい程の鋭さで星空を区切っています。時々凄じい音を立てて、マナスル氷河の一角が崩れ落ち来る外は何の音も無い凍りついた世界です。

都会に居る時は滅多に見ない星空ですが、こうしてネパール・ヒマラヤの一角に居ても、夜中にテントを出て空を仰いでいると、ふとここがマナスルの麓であることを忘れてしまいます。中学の頃から、ずっと長い間親しんできた日本の冬山でも、繰返してこうして夜空を仰いだその習慣が、この様な處へ来た現在でも、懐しい信州の何処かの峰々や、楽しい山行を共に重ねて来た山友達の事を身近に想い出させて呉れるのでしょう。

遥々とここまでやって来た訳ではありますが、初めてヒマラヤという處へ来て見て、色々と小生も勉強になりました。氷河の水がこんなに濁っているという様な事も初めて知った次第ですが、ブリガンダキのルートがこの様に簡単に通れるという事も、日本で本を読んでいたのでは、想像もされない事でした。こうした経験を一々書き留めてゆくと、とても書き切れるものではありません。特に冨士山頂よりも高いベース・キャンプ辺りより上になってからは、もうすっかり何も彼も初めての事ばかりで、完全に足が地を離れてしまった心地です。この様な経験は

といつても未だほんの僅かではありますが――を綜合して今日は書いて行き度いと思います。

第一に、ヒマラヤと雖も矢張り日本の山の連続又は延長であつて、況して日本の山からヒマラヤへ行く事が不自然な飛躍や、不連続とはならないと思います。日本の山での経験が飽く迄もヒマヤラでの基礎であることに変りはありません。例えば、マナスルの登攀の成否を決するものは結局雪崩との斗いです。如何なる場合に、如何なる場所でそれが起るかという事が登るという事よりも遥かに困難な事柄です。命令（と言つても別に命ずると云う様な事はありませんが……）通り、運行表の通り、動き、泊り、そして登つていたのではこの際クライマーとしての價値はありません。誰も自分以上には自己の状態を知つている者はいないし、自らの山の経験の全てを挙げて、適宜に進退を決めて行くという事が行われねば、どうしても隊としてスムースにテントを推し上げてゆく事は出来ないでしよう。それが出来るか、出来ないかと云うことは僅かにヒマラヤでの経験ではなくして、日本における一つくの山行に依る他はありません。

第二に、ではヒマラヤにおける経験と云うものは実際にヒマラヤでどの様に表われて来るだろうか、と云う点を第一の点と関連して採り挙げてみましよう。この隊には、ヒマラヤへ三度出掛けた者、そして小生の様に初めての者と三組が当然の事乍ら組み合わせられています。体の状態や態度等から結論的に云いますと、三度、二度組の間の差は余りないけれども、一度組との間には相当な差があると云う事です。勿論夫々の個人差が始めから有る事ですから、断定するには更にもつと日数を掛けなければなりません。個人差と言えば、こうした處へ来て始めて気付く事ですが、ヒマラヤが初めてであろうが、何度目であろうが、そんな事を超越して重要な事は、その人間の持つている人柄であると思い

ます。所謂人間が出来ていると云う事が、即の強さという様な事を小さく見せてしまうのがヒマラヤです。此處を登る為には、ヒマラヤに價する様な修養の出来た人格が必要です。残念乍ら小生はこの点まだ〳〵駄目の様です。

第三には、エクスペディションの内部で、クライミングの占める比重が想像以上に少いと云う事も実際に来て見て始めて判った事柄でした。隊の行進を阻む幾度の出来事の殆んどが登山行為以外の出来事でした。ベースキャンプに着く迄に実に多くのクライミングがありました。隊の進行の上にも、私個人の出発に際しても……。

第四に、私達が注意しなければならないのは、都会における登山家の生活態度だと思います。贅沢に馴れてはそれだけ、ヒマラヤから、山から、遠ざかってゆくという事に他ならないと思います。

最後に、生命の危険について触れて置かねばなりません。早くも登頂を目指して、キャンプ・ワン・デポーへの荷上げ開始と共に、好むと好まざるとに拘らず、その幕が切って落された現在、この事を書き出そうとする小生の心境は甚だ複雑です。然し、何人もこれを避けて通る事は出来ません。この問題は、今、此處で考えて置かなかったならば、死んでしまえば何も言えないだろうし、安全に事が済んでしまえば、後では必ずゆがめられたり、忘れてしまったりする可能性があるからです。私達は、山で恐しい目に逢い、もう二度とこんな事はよそう、と何度か思い、シーズンが来ると又出掛け、もう本当に足を洗おうと思い、そして……、やがてこんな繰り返しの後に、諦めて、止めようと思わなくなってしまうと云った経験を持っています。又、冬山の前に書き置きの様な物を残して出掛ける人も知っています。山、というより自然の恐ろしさを知れば知る程、これを一蹴に笑って済ませる訳には行きません。では、ヒマラヤでは一体どの程度生命がおびやかされるでしょうか。

恐らく、少く共、八千米峰では百%安全であると断言出来る人は一人もいないでしょう。何十年、或は何百年も待らなければ、現代の科学の力を以つては、百パーセント安全に八千米峰の登頂を為し遂げる事は未だ全く無理だと云えます。登山が、スポーツでありながら、何か他のスポーツと異った様に考えられるのは、更にこの辺りに根ざしているのかも知れません。未る時の船の中で、槙さんが言っておられましたが、鐘や太鼓ではやし立てれば、死をかけてヒマラヤへ出掛けようという人間は、いくらでも出て来るけれども、本物のクライマーというものは案外居ないものかも知れません。一度食いついたならば、横から、誰が何と言おうが、どんな事が起ろうが、つかまえて離さないといった人間登頂と言った華かな面よりも、エキスペディションに必要な地味な下仕きを黙ってする人間が、これからの山岳部には育って来なければならないと思います。

ヒマラヤエキスペディションは、一つ一つが大きなスケールを持っている様に、却って、その本質を見失いがちですが、しかし、あくまでも日本の山における、更に大学を出てからの山行の経験が大きくものを云う基礎になる事を覚えて居て頂きたいと思います。しかし、誰も彼もが、大学で山登りを熱心にやっていた人間の全てがヒマヤラへ行けるかという事は決してありません。（例えば、若しこの私達のマナスルが失敗すれば、当分は駄目になるでしょう。）私達の周囲を眺めて見ても、明日にでもカルカッタ行きの切符が貰えそうな人、遂に行けなかった人・スキーや他の事が面白くなって山を去った人・仕事に追われてすっかり忘れてしまった人など、如何に多くの人々がいる事でしょう。小生が、こうして今、マナスルの山麓に立っているのも単なるチャンスであれば、テンシンがエレベストに登頂したのもほんのチャンスであることを思えば、この事は直ちに納得のゆく事

です。別にヒマラヤへ行くことだけが私達の山登りの全てではない事は云うまでもありませんが、しかし、何時かはヒマラヤへも……と考えながら過す部の生活というものも亦、張り合いのあるものだと思います。

今度の遠征でも、小生は遠征組織というものを底から見ならう。直接山そのものよりも、隊長や隊員相互間の問題や、人間の個人感情といつた事に注意を拂つて来ました。酸素や食糧装備も勿論大切ですが、結局山へ登るのは人間だからです。私達の大学でヒマラヤへ遠征隊が出せる様になつたらどんなに素晴らしいだろう、と思いながらこうした具体的な事に注意を拂うことは又、楽しいものです。

何れにしても、一つの釜の飯を食つて育つて来た私達が、お互いのフレンドシップを決して登山のみに止めず、遊びにも、その他の事にもずつと維持してゆくことが、ヒマラヤ研究などといつた事よりは遥かに現在の私達にとつては大切な事だという気がします。

昨日着いたポストランナーからの新聞で、立教の遭難が報ぜられ、小原監督が大いに気にしています。日本の山で、狭い黒部を渡ろうと渡るまいと、そういう事を決してつきつめて考えたりしないで、のびゞとした明るい山行をして頂き度いものです。私達も亦、安全な、愉快な山行を、この美しいヒマラヤでやるつもりです。

手が冷たいので、大分読みにくいと思います。がおゆるし下さい。

四月八日

ベース・キャンプにて

山行記録

1955年8月～1957年3月

一九五五年

7月3日　仁川岩登り　10名

8月8日～8月9日　伊吹山　岡田

8月21日　比良打見山　岡田他

9月4日　仁川　岡田

10月10日～10月12日　上高地　岡田他

10月29日～11月4日　双六岳冬山荷上げ

　　兵庫、岩永OB、片山、村瀬、岡田、

　　一山、森川、山田、飯田

11月23日　道場　岡田他

12月3日～12月4日　高木、岡田

　3日　四日市―御在所山の家

　4日　山の家（6.00）―御在所山（9.00）

　　―愛知川源流―杉峠（12.00）―雨

　　乞岳往復―藤切谷―山上（16.30）

　　―安土―大阪

29日　大阪発

30日　高山―神岡―袴尾（14.00）―中尾

　　（16.00）

31日　中尾（6.00）―双六小屋（17.30）

1日　薪作り

2日　双六小屋（10.00）―槍ヶ岳（14.30）

　　―槍沢小屋（18.00）

3日　槍沢小屋（7.00）―上高地（16.00）

4日　松本（0.43）―大阪

12月30日―1月5日

槍平より槍

　久保、由比浜、田島、山本（全部OB）

12月30日　大阪発

12月31日　曇

　　岐阜（5.21）―高山（9.18～30）―船津（11.30

～12.00）―栃尾（13.30～14.30）―槍見温泉（17.00）

神原荘には可成りの積雪あり・バスは折柄の帰省客で満員・栃尾からは雪はうすら地表を覆う程度なるも、槍見の手前から約一尺程度となる。

1月10日　曇時々霰雪

槍見（8.30）―双股（9.00～9.10）―小鍋谷（10.00～10.10）―柳谷（12.45～13.15）―白出谷（15.00）―滝谷（20.00）

朝忘れ物をして出発が遅れる・雪は双股を過ぎてからトレースがなくなり急に深くなる・小鍋谷につづく高巻道は草付の雪が不安定でスキーが雪ごと横すべり、後すべりして時間を食う。柳谷から後はラッセルと重荷に苦しむ・白出と滝谷の間で日が暮れ電灯をたよりに道を河原に求めていくも、滝谷出合で行詰り・ビグアークに決す・一寸した岩蔭に三人もぐり込んで寝る。

（註）山本準勇太郎発、栃尾に泊る。

1月2日（曇のち晴）

滝谷出合（10.30）―槍平（13.30）

滝谷から上もトラバース道のラッセルがひどいが、しかし順調にはかどる。南沢を過ぎる頃より天候回復にむかい、北徳滝谷側の壁が見え出す・槍平は積雪約二米。小舎は二階を使用・非常に快適・山本、夜に入って到着・全員揃う。

（註）（山本）栃尾（7.20）―タクシー→宝→双股（9.00）→滝谷（17.00）→槍手（19.00）

1月3日　快晴

槍手（6.00）―飛弾東麓下のスキーデポ（11.00）→肩（11.30）→ピーク（12.30～13.00）→肩（14.00～14.45）―デポ（15.10～15.35）―小舎（16.45）

1月4日　高曇のち雨

小舎（9.00）―滝谷（10.00）―白出手前の着枝場（12～13.30）―白出（13.50）―小鍋谷（16.30）→槍見（18.30）

この谷道では下りでも余りスキーの威力は発揮出来ない。

1月5日　曇
　　稲見ー拝尾ー沼津ー高山ー大阪

一九五六年

2月18日ー2月29日　　細野

○細野スキー場　2月18日ー29日

　　木村、松木、岡田、部外者五名

18日　木村、松木他五名17時10分大阪出発

19・20・21日　咲花、名木山で練習

22日　黒菱スキー場往復、岡田大阪発(17.10)

23日　咲花スキー場　部外者五名帰阪

24日　咲花、名木山

25日　名木山、松木帰阪(14.00)

26日　八方尾根第三ケルン往復、快晴なれど

　　第三ケルン附近では烈風吹き荒ぶ

27日　名木山

28日　名木山、夕刻宿を発ち、大町にて春山

　　合宿の打合せをする

29日　木村、岡田大阪着

3月29日ー4月6日　樋下他二名

　　名張ー山上ヶ岳ー洞川

4月22日　　西川他一三名

　　蓮華峡岩登り

4月27日ー4月31日　　山田、乾

　　八ヶ嶽

○メンバー　山田、乾

4月27日出発

　　28日　晴

　富士、南アルプス、奥秩父の峰々を背に八ヶ岳山麓を縫って走る小海線の松原駅で下車・本沢温泉に到着したのは午後五時頃だった。本沢温泉手前から残雪が現われた。

　　29日　雨のち晴

　夜半過ぎからの激しい風雨も昼頃治まったので夏沢峠から天狗岳に向ったが稜線は未だ風が激しく根石岳で引き返した。

　　30日　快晴

　陽が昇る頃本沢温泉を後にした。夏沢峠に荷、

物を下し根石岳天狗岳を往復・眼下にうねる一曲の流れ。見渡たせば遠く近く北アルプスの連峰や木曽御岳の大きく裾をひいた姿が美しい。峠に戻り直ぐ荷物を肩に硫黄岳の急斜面を過ぎあえぎ〳〵登りつめた横岳の向うに息をのむ程富士が美しい。稜線にはほとんど雪はないが赤岳の斜面にはさすがに多い。横岳、赤岳、鞍部の石室に荷を置き赤岳頂上に着いたのは十二時半頃だった。下りは赤岳の斜面をトラバースして一文字に画界尾根へ降りた。後は樹林の中をただがむしゃらに下るだけ。

4月29日　　十三名

道場岳登り

4月30日～5月1日　西川

谷川岳　　田島OB、樋下

5月3日～5月6日

剱岳

メンバー　田島OB、樋下

3日（晴）富山（9.18～11.50）→立山駅（13.00～13.40）→美女平（14.45～15.00）弘法小屋（18.40）

富山で甚だ便利悪く二時間半待たされる。ケーブルなし。途中で道連れになった富山大生二人と行く。尾藤東の下って来るのに逢う。弘法小舎は満員六畳に十二人ブケ込まれる。

4日（快晴）　弘法（6.20）→追分（7.00）→天狗（9.30）→室堂（11.00～11.30）→一ノ越（13.00～13.20）→雄山（14.00～14.30）→一ノ越（14.50～15.00）→雷鳥沢（16.00）

朝少し天気が怪しいが行く程に良くなる。調子は余り良くない。一ノ越直下でブルドーザーがガリ〳〵と走っていたのには驚いた。天気が良いので稜線の眺めは又格別。一ノ越から雷鳥沢迄スキーは快い。雷鳥沢小舎も満員。

5日（晴のち曇）　雷鳥沢（6.10）→別山乗越（7.30～8.00）→平蔵コル（10.40～11.00）→頂上（11.30～12.00）→平蔵コル（12.30）→別山乗越（15.30～16.15）→雷鳥沢（16.30）

大阪好日山荘の連中に同行。雷鳥沢は担いで

登る。平蔵の上の岩場は裏と同様。下りは前傾の下りの雪の状態悪く一寸厄介。雷鳥沢の下りは斜滑降横辷りが威力を発揮。

5月6日（雨）　雷鳥沢（8.30）→天狗（9.00）→美女平（12.30）

雨でビショ濡れでゆううつ。ガスで見透しが利かずスキーも出来ぬ。

5月3日－5月6日　岡田、四方、村瀬（新人）兼清、渡辺、田中、山本、野田

新人歓迎比良山

5日　ひら駅（10.40）→大山口（12.00）→テント設営後全員カモシカ台まで散歩、雨近し。16.30夕食後テントへ炙る。夜間雨激しく夜中補強工事をする。

5日　大山口（9.15）→金糞峠（10.20）－八雲ヶ原（11.00）→武奈ヶ岳往復→八雲ヶ原（12.30）→北比良峠→大山口（13.30）→ひら駅（15.00）

おくれて来た村瀬は昨日、間違えて八雲小屋に泊っていたそうで武奈ヶ岳頂上附近で逢う。連休で遠くへ出掛ける者多く、ゲルの乏しき者ばかりのささやかな歓迎キャンプであったが、実に楽しい山行だった。

5月5日－5月7日

山本OB、大村OB、坪井、辻川、飯田、松木OG、森川

木曽駒ヶ岳

5月20日　西川、野田、兼清、山本

恕河谷岩登り

5月26日　岡田、野田

芦屋ロックガーデン

6月3日　西川、森川、山本

芦屋ロックガーデン岩登り

6月10日　西川他十三名

六甲大月谷

6月15日－6月17日　辻川、岡田、山本、野田

伯耆大山

16日　大山口→大山寺→天谷小屋→頂上→

元谷小屋

17日　元谷小屋→大山寺→帰阪

元谷ヒュッテは十幾つかの寝台と丸木の威勢良く燃えるコントルピースのある可愛い小屋である。

6月17日　西川他五名

蓬莱峡岩登り

6月24日　西川他十四名

道場岩登り

7月12日　西川他八名

芦屋ロックガーデン岩登り

7月15日　西川他九名

蓬莱峡岩登り

8月16日～8月17日　岡田

大台ヶ原

16日（曇）上市→筏場→近鉄山の家

17日（曇）往路下山、猛烈な雨に本沢は彩雲一変していた。

8月19日　西川、岡田、野田

道場岩登り

10月8日　乾

鈴鹿

四日市→湯の山→御在所三角点→武平峠→鎌ヶ岳→武平峠→野州川ダム→土山→水口

10月10日　乾

比良山

びら駅→大山口→北比良峠→八雲ヶ原→武奈岳頂上往復→八淵の滝→梅ノ滝→北小松駅

10月10日～10月13日　山田、渡辺、山本信、兼清、野田、

木曽駒ヶ岳

10日　大阪発23時10分

11日（曇後雨）　上松駅9時35分→敬神滝小屋→金懸小屋15時10分

12日（薄曇）　金懸小屋発8時20分→頂上11時10分→宮田小屋→金懸小屋15時

13日（曇）　金峰小屋発7時45分－敬神澤小屋－寝覚床－（バス）－上松駅11時40分
同駅発12時46分

甘じめ縦走の予定が、思わぬ悪天候のため、又中央アルプスは初めてのものばかりであつたので、大事をとつて木曽駒のみに目標を変える。

10月12日－10月14日　岡田L、森川　他一名

木曽御岳

12日　木曽福島駅のプラットホームでシュラーフを拡げて初発のバスを待つ。登山口でバスを捨て、黒沢口から登る。まさに絢爛たる紅葉の季節である。四合半辺りの芒原を見事だった。六合目中小屋に泊る。

13日（雨）　可成りひどい降りだつたが、森川は雨の中を歩いてみたいと、単身頂上に向い二ノ池、三ノ池を廻つて来た。

14日（ガス後晴）　昨日の雨は東鞍岳以北で雪となつたらしい。森川を残して後片付を頼み、昨日同様のコースを辿る。午後荷物をまとめて下山。

10月21日－10月25日　坪井OB他数名

上高地

連日の雨のため小梨平にキャンプしたのみ。

10月22日－10月25日　田島、由比浜

木曽御岳

23日（快晴）木曽福島（10.20）－黒沢（10.50）－五合目小屋（16.00）

24日（快晴）五合目小屋（7.30）－剣ヶ峯頂上（13.52）－飛弾頂上（15.15）－濁川温泉（17.20）

25日（曇）濁川温泉（7.35）－オカ工谷（8.20）－石楠花沢（9.00）－四合目（9.25）－一合目（12.30）－落合（13.30）－小坂駅（14.05）－帰阪。

10月28日－11月3日

北岳

北岳バットレス第五、第四尾根のトラバースルート偵察。池山小舎への食糧荷上を目的として一週間秋色濃い南アルプスの山旅。

期間　10月29日～11月3日

・参加者　西川元夫・飯田総、兼清喜雄
　　森川欣三
・天　候　雨・雨・曇一時雨・夕方より晴・快
　　晴・晴・巻雲・高曇・
・行　動
29日　雨
身延線の車中から降り出して、今日一日降り続き夜半に至るも未だ強風さえ伴って降り続けている・芦安から峠への登りは旧道を使った・野呂川谷は紅葉のトンネル・
甲府（〇九〇〇）→バス芦安（一〇〇〇〜一〇三〇）→トンネル出口（一四三〇）→鮎屋（一六二三）→荒川小舎（二〇三〇）
30日　雨
午前十一時一旦出発しようとしたが雨愈々激しく停滞ときめる・この小舎は風が人なつこくできている・
31日　曇
朝起きた時は星は全に、鮎用が野呂川の上に無気味にかかっていたが、出発する頃から一つ三つ消える星がさびしい。池山のピーク当りから雨が降り出し、小舎を急いで見つけほっとする。池はまわりに底知れぬ森をめぐらした幽絶境。午後は冬の準備に薪をどっさり作る・夕食後快晴・池は無数の星を浮べた・
荒川小舎（〇五三〇）→池山ピーク（一〇〇〇）→池山小舎（一〇一五）
1日　快晴
小舎に米30kg、クラッカー8.5kgをデポしたので一行の足どりも急に軽くなった・その上快晴と来ている。新雪を踏む触感も楽しい。北岳の小太郎側の雪はアイスクラストしていてビブラムが滑り少々困り、草すべりの下りにはうんざりした。
池山小舎（〇六五〇）→砂掛の頭（〇九四四〜一〇二三）→八本歯コル（一一四六）→主稜線（一三〇〇）→頂上（一三四〇〜一四三〇）
■■■■御池小舎（一七〇〇）

2日　晴

大樺沢は昨夏のキャンプ地の巨石がなつかしい・流れは半分氷で飾られ、b、cガリはきれいなアイスフォールをつくっている・西川、飯田がバットレスへ向い他の二人は先に玄河原へ下ることにする・旧雪がまだ大きく残っていることは珍らしい・

バットレスはeガリを上りカッオブシの下から第五尾根のトラバースにかかりdガリに出た。dガリからみた第四尾根は天に聳える逆層の壁である。このトラバースルートとして明かに三本確認出来・上の二本は此處に草をつけている。我々は中央のを採ったが一ヵ所いやなところがあった。

白根小舎（〇九〇〇）↓大樺沢（〇九二〇）↓バットレス沢出合（〇九五〇）↓eガリ出合（一〇一〇）第四尾根スラバース了（一四三〇）↓aガリ↓バットレス沢出合（一六一五）↓白根小舎（一七〇〇〜一七二〇）↓玄河原小舎（一九五〇）

3日

河童に別れを告げて出発・夏にはガスで全々見えなかった玄河原峠からの八ヶ岳に驚く・袋沢出合まで下って昼食とする・赤なぎ沢の滝は立派なもの

玄河原小舎（〇八〇〇）↓玄河原峠（一〇三〇）↓袋沢出合（一二〇〇〜一二五〇）↓赤なぎ滝（一四三〇）抑沢（一七〇〇）↓バス甲府

10月30日ー11月4日　森川、一山

穂高

31日（雨）上高地（10.10）ー徳沢ー横尾山荘（14.30）

1日（晴）横尾（7.40）ー涸沢小屋（10.40）ー穂高小屋（14.00）ー奥穂頂上（14.50）ー涸沢小屋（16.50）

2日（晴）涸沢小屋（8.10）ー北穂頂上（11.15）ー涸沢小屋（14.10）ー横尾山荘（16.25）

3日（曇）横尾（7.20）ー上高地（10.10）ー焼岳頂上（13.10）ー上高地（21.00）

10月30日ー11月5日　岡田し、他二名

穂高岳

30月　大阪発

31日（雨後晴）　島々では秋空の下に紅葉が見事だったのに、上高地ではひどく降っている。しかし次第に雲が去り白沢出合では明神岳が全貌を見せた。徳沢で今日船止から来る仲間を待ち横尾小屋に泊る。

11月1日（晴）横尾（八・〇〇）ー涸沢ヒュッテ（一〇二〇～一一・三〇）ー北穂北峯（一五・〇〇～一六・一〇）ー涸沢コル（一七・〇〇）ー涸沢ヒュッテ（一九・〇〇）

雪はザイテングラード迄しか下りて来ていなかった。例年より雪は遅いがそれでも新人がおり滝谷側のトラバースはガスに巻かれ可成り注意を要した。

2日（晴）ジャンダルムを往復する積りだったがアイゼンが足らないのでロバ、耳の手前から引き返えした。荷物をまとめて明神池迄下る。

3日（曇）暫者にて若登りを楽しむ。ここから明神岳を観察す。

4日（曇）十時頃のバスで上高地を離れる。朝方の雨で明神最南峰は新雪をつけた。

5日　帰阪。

11月2日ー11月5日　町田他十名

3日（曇）大山口ー大山寺　散歩後休養

4日（快晴）大山寺（8・15）ー頂上（9・55）（10・20）ー三鈷峰（11・30）（12・30）ー大山寺

11月8日ー11月10日　坪井、東（いずれもO.B.）

富士山

8日　快晴

大阪発（9・42）ー吉田（20・00）ー馬返（21・30）

9日　晴

馬返ー五合（1・00）ー八合（6・00）ー頂上（7・40）ー須走五合（9・00）ー須走（14・30）ー御殿場（15・54）

10日　大阪着（5・10）

最短時間で富士に登るため吉田ー頂上ー須走夜間登山になった。雪は五合五勺附近より つき

本格的には七合以上であったが快晴無風のため富士のもつスケールの大きさを充分楽しむことが出来た・小舎は五合と五合五勺に人が入っていただけである・

11月12日　乾

吉野ー山上ヶ岳ー吉野

11月23日　岡田

道場

11月23日ー11月24日　坪井（O.B）他数名

北良山（武奈ヶ岳）

11月25日　乾

鈴鹿

湯の山ー藤内壁ー御在所岳ー国見山ー水晶岳ー根の平峠ー朝明ヒユッテー蒜野

12月1日ー12月2日　山田、兼清

1日　湯の山山の家20時着

2日（晴）山の家ー武平峠ー鎌ヶ岳ー武平峠ー御在所岳ー湯の山

12月22日ー12月31日　乾

天賀高原、戸隠、飯縄

23日（晴）長野ー湯田中バス丸池

24日（曇時々雪）丸池ー熊の湯ー笠岳ー熊の湯

25日（快晴）熊の湯ー横手山ー熊の湯

26日（曇時々雪）丸池バス長野駅バス戸隠中社ー和沢口

27日（快晴）和沢口ー戸隠中社ー越水高原ー戸隠奥社ー和沢口

戸隠表壁を正面に鹿島槍から槍穂高迄迄くは飯縄黒姫を望み積雪約二米の白樺と落葉松の高原・ソバの旨い事天下一・

28日（晴後小雪）鬼女の紅葉で有名な荒倉山

麓をスキで訪れる・

29日（快晴）和沢口ー中社ー飯縄山ー中社ー和沢口

30日（晴）和沢口ー奥社ー和沢口バス長野駅

一九五七年

12月31日－1月1日

富士山

1月1日－1月3日

富士山

参加者　岡田、森川、一山、坪井OB、由比浜OB、三枝OB

女子部員、先輩を主体とするパーティで吉田口からの登頂を目指した。

12月31日　大阪発

1月1日（晴）吉田発（一四・〇〇）馬返し（一四・三〇）五合目小屋（一七・〇〇）

1月2日（高曇）起床（三・〇〇）出発（四・四〇）経堂（五・三五）六合半（六・二〇）零下八度、風は頂上方面より僅かに吹き下すのみ。ライトをしまう。七合半（八・〇〇）アイゼンをつける。八合目（九・三〇）頂上附近から急速にガスが拡がる。風弱し。

久須志神社（一一・一五～一一・四五）弱いながらも風雪化。石まわりに剱ヶ峰へ。剱ヶ峰測候所（一二・三〇～一四・〇〇）火口を一周して久須志神社（一四・三五）零下一二度。八合目（一五・三〇）頂上ガスで見えず。七合半で大沢に入る。五合小屋着（一七・四五）。

1月3日（晴）起床（三・三〇）出発（四・三〇）坪井、三枝、森川、一山出発す。富士吉田駅（七・四五）帰阪。岡田、由比浜は遅れて下山し伊吹山へ向う

1月4日（晴）伊吹山一合目でスキーをする。夜、帰阪。

1月12日－1月13日　乾

伊吹山

1月20日　乾他三名

鈴鹿御在所岳

2月2日－2月6日　乾

吾妻山。

2日　福島－米沢－福島－バス－信夫高湯

阿武隈川より見る安達太良、吾妻連峰は実に美しい。

3日（曇後風雪）　高湯ー家形ヒュッテー高湯

悪天のためヒュッテより引返す・羽毛のような粉雪で怖しい程のスピード・積雪50、バス不通・

4日（雪）スキー　積雪180

高湯ー福島ー帰阪

2月26日ー3月4日　辻川、岡田、東他三名

細野　スキー行

26日（曇）辻川、岡田、名木山で練習

27日（雪）名木山

28日（地吹雪強烈）名木山

3月1日（曇後吹雪）東他三名到着し、午後全員黒菱小舎に登る・

2日（晴）唐松岳往復後細野へ下る・

3日（晴）岡田を残して五名帰阪・岡田は咲花、名木山でスキー。

4日（曇）午前中名木山・午後細野発、帰阪。

3月3日ー3月4日　乾

伊吹山

3月9日ー3月15日　み本・兼清・野田

黒菱　スキー行

9日（曇小雪）細野丸山与兵衛氏方へ着く。兼清、野田が先着していた・午後は咲花へ行った・ゲレンデには人が少く練習は快適・

10日（曇雪）野田帰阪・午前中咲花へ行き、午後遅く黒菱へ出発した・名木山二時、黒菱四時。

11日（雪）新雪が深く昼間もずつと雪が降り通しであつたので少人数（二人）でのラツセルは苦しく・全く面白くない。

12日（風雪）朝から雪が降りつゞき午後になつて風も加わつたので練習中止・

13日（晴）五日ぶりに晴れて小屋の外へ出ると目がまぶしい・快晴に恵ぐまれたので第三ケルンへ登ることに決める・

出発九時ー第1ケルン十時ー第二ケルン十時

五〇分ー第3十一時十分ー黒菱小屋十三時。
第二ケルンから上は風あたりが強くなって、第三ケルンの手前のこぶの辺りは石が露出していたのでスキーをかついで登る。周期的に風が強くなり身体ごと吹き飛ばされるような気がする。風上側には氷がはっている。第三ケルンへ着くなりすぐ下った。

午後三時半、黒菱を出て四時半名水山ゲレンデに着いた。与兵衛氏方で宍戸先輩に会う。

14日　兼清、山本は咲花へ。宍戸先輩は黒菱へ。午後の練習が済んだ後、兼清は帰った。

15日　名水山ゲレンデで練習をして最終で帰阪。

—完—

（山本）

阪大山岳会時報＝編集後記＝

○いろいろの事情で時報の発行が遅れた為Ⅷ号は一九五五・五六両年度の合併号となりました。従つて内容も全く記録中心となつてしまいましたが悪しからず御了承下さい。

○本号は紙数の都合で集会記録は割愛しました。併せて御了承下さい。

○篠田先生には御出発前のお忙しい中、これからのザイルの一文を頂きました。ザイルについて色々論議されているときでもあり興味深い問題だと思います。

○徳永先輩のマナスル便りも発行が遅れた為時機を失した感があります。この点深くお詫び致します。

○会員名簿はⅦ号をもとにして作成致しましたが記載洩れ誤りがありましたら編集者までお知らせ下さい。尚、町村合併等で住所に変更がありましたらお知らせ下さい。

○編集者の不慣れの為いろ〳〵欠点もある事と思いますが、お許し下さい。

編集責任者　乾　正

会員名簿

一九五七年一〇月現在

会長			豊中市麻田九七
篠田軍治			阪大工学部精密工学科教授
医学部			
和田豊種	明32	先輩	大阪市北区南森町五二（35一四一三）
小浜基次	昭3	〃	阿倍野区王子町　南校職員寮
水野祥太郎	〃5	〃	神戸市東灘区御影町郡家御影住宅三〇三号
国星勇吉	〃5	〃	大阪府茨木市仲之町
小林義郎	〃9	〃	大阪市西淀川区野里町一二九五（淀川一三〇六）
坂谷信次	〃14	〃	兵庫県印南郡船形村
河原信二	〃14	〃	神戸市東灘区住吉町塚内二二四（御影二二〇六）
新谷五郎	〃14	〃	豊中市桜塚元町一丁目一四七（豊中三〇七〇）
小沢淳二	〃14	〃	泉佐野市天神山下百屋敷（泉佐野八六五）
酒井英之	〃15	〃	豊中市本通三丁目四五
滝一郎	〃16	〃	大阪市南区千年町一四（西八五七一）
岡崎晃	〃16	〃	池田市字保町一〇四
恩知裕	〃18	〃	西宮市今津水波町一七一
友田洋一	〃22	〃	大阪市天王寺区鳥ヶ辻
大久保克己	〃23	〃	貝塚市塚一七一
伊藤俊夫	〃23	〃	尼崎市開明町一丁目一三
山林一	〃24	〃	大阪市西区新町通二丁目四六
浸辺修治	〃25	〃	太阪府豊能郡箕面町平尾七三〇
吉川定範	〃25	〃	布施市長田

小川彌栄	昭25	西宮市甲子園四番町四四	国立療養所刀根山病院（渡米中）
穂永篤司	〃26	大阪市東淀川区十三東之町三丁目（37二〇二九）	阪大第一外科
松久博	〃26	〃　南区桃谷町一五	阪大第一内科
家田千尋	〃28	伊丹市伊丹三五七（伊丹二〇二二）	阪大産婦人科
住吉仙也	〃29	西宮市羽衣町九七（西宮三一六）	神戸医大解剖学教室
尾藤昭二	〃30	大阪府泉北郡信太村聖ヶ岡	阪大第一外科
東雄	〃30	大阪市阿倍区阪南町中六丁目一六	阪大微研
小沢逞夫	〃30	芦屋市三条通六七（芦屋四五四七）	
岩永剛	〃30	堺市武庫山一四	
坪井圭之助	〃31	布施市稲田一六一四（布施三一一九）	阪大第一外科
林伸一	〃31	神戸市灘区森後町一ノ二	インターン
宍戸元	〃32	西宮市松籟荘二五	インターン
片山徹	〃32	愛媛県八幡浜市川名津	

理学部

永野健次郎	北11	芦屋市三条町六三	
山口省太郎	物13	〃　〃　九二	美津濃副社長
関隼三	北13	〃　月若町七三	阪大理学部物理第地研助教授
国府雄二郎	物15	〃　三条南町九三	〃　仁田研助教授
新保正樹	北15	西宮市松籟荘九〇	阪大理学部伊藤研
赤松二郎	〃16	〃　仁川町一ノ七七	美津濃技術研究所
塩野良之助	〃20	神戸市東灘区住吉新堂四五（渡英中）	醸造科学研究所
高倉達雄	物21	〃　垂水区西垂水町一六四	阪大理学部
塩野喜久夫	化23	〃　東灘区住吉町新堂一四三（御影二二六九）	阪大理学部渡瀬研
棚山後樹	〃23	尼崎市潮江住宅四〇一	大阪ガス中央研究所

大島輝夫	化	27	24	神戸市東灘区御影町平野一五（御影三八〇八）
加藤幹太	生	27		大阪府豊能郡箕面町桜井（桜井二五八）
細貝一仁	生	28		大阪市福島区上福島南二丁目（福島六四〇八）
堺谷弘	化	28		西成区玉出本通一，一。
大村一生	物	29		豊中市岡町南五丁目三二（豊中三〇九〇）
山本進一郎	物	31		大阪府豊能郡箕面町箕面八六三
関本靖治	物	31		和歌山市西浜町二六〇
高木俊夫	化	31		堺市上之芝町四丁目
工学部				
川ケ後治	機	5		豊中市新免六二二（豊中三一七八）
山口次郎	電	黎 7.5		岐阜市加納朝日町三丁目
仙波正	船	7		京都市伏見区深草飯倉田町府営住宅一一六
武田正幸	機	8.5		堺市北旅篭町東一丁二五（堺九〇四）
村上竜郎	。	9.5		北海道空知郡赤平町住友赤平聚英寮
川島勇	機	29		尼崎市武庫之荘四丁目三〇
宮本真雄	通	29		大阪市阿倍野区天王寺町二六二八
二木節夫	通	29		尼崎市潮江ゲゼン寺
近藤璋三	精	29		大阪府豊能郡箕面町牧落三八六一
李中勝	船	31		兵庫県明石市相生町　丸山殺方
鷺沢忍	機	31		神戸市生田区中山手通七，八
立花直治	精	31		芦屋市打出翠ヶ丘町五三
嶋海淑雄	治	31		大阪市東淀川区下新庄町二，五四
西川元夫	電	32		吹田市南泉町二六三五
戸井祥夫	化	32		

阪太理学部本城研
阪大歯学部二年在学中
阪大理学部浜田研
日本電気KK
日立電気KK
阪大理学部大学院
KK大阪ボイラー製作所
阪大工学部電気科教授
仙波能率事務所
東海機工KK
明光精機製作所代表
住友石炭KK
早川電気KK
阪大工学部大学院
川崎飛行機岐阜製作所
阪大工学部大学院
阪急電鉄
近畿日本鉄道KK

雉木二郎	精32	堺市柳之町三ノ二二	
経済学部			
田島汎	昭28	芦屋市宮川町一三（芦屋二二一〇）	
土屋直	29	〃 楠町五七（芦屋三六四八）	
由比浜哲也	30	西宮市今津町六石角一八四五	
玄橋茂	30	西宮市末広町五	
木村裕一	31	大阪市城東区放出町三五六	
辻川眞	32	〃 阿倍野区阿倍野筋三ノ一五（ア一七三）	
経済学部			
山本光二	29	芦屋市大原町九五（芦屋三六二九）	
薬学部			
抱忠男	29	大阪市旭区大宮西之町一丁目四一	
三枝礼子	30	東京都都区赤坂町福吉一ノ四九	
井上一枝	30	神戸市東灘区御影町一里塚一〇九三	
歯学部			
石沢命久	32	豊中市本町七丁目二四ノ二（豊中三三七一）	
文学部			
松木保枝	31	大阪市阿倍野区三明町二ノ三八（ア一七三四）	
高島幸男	北9.6	姫路市鋼千区新在家九四。	
斉藤俊貞	昭9	尼崎市富田園和一ノ三一	
池田茲	10		
梶原信男	11		
吉見俊一	昭11	京都府乙訓郡長岡町関田下町（神足二六）	

		住友金属㈱
		住友金属㈱和歌山製作所
		豊中一中教官
		西宮市役所
		日本アルミ
		大和銀行三宮支店
		田辺製薬
		日本衛材
		阪大薬学部大学院
		阪大歯学部大学院
		日ヒル鋼千工場
		大阪鍛造㈱
		日立製作所鋳造部
		日本郵船大阪支店工務課長

河原日章	機12	西宮市高木石沢町三三　西瓶莊	いすゞ自動車KK川崎工場
池宮清二郎	船12	大阪市東淀川区三國町一二二三（三國五四九）	田村香料KK
田村禎造	化12		福井精錬KK
黒川誠一	機13		明和産業KK
坂上秀夫	〃13	芦屋市大桝町七八四（芦屋四三二六）	関西電力近畿支店工務部
遠藤常忠	電13	大阪市阿倍野区山坂西之町三一二	航空庁調査課
大沢沢信一	船13	東京都杉並区車田町二，一五。	日本純良乗品KK
福田正治	化13	京都市左京区粟田口鳥居町四七（吉田三二六）	荒川林産化学工業KK
吉田達三	〃14	芦屋市打出小槌（芦屋四五一八）	汎建製作所
川村坂	機15	豊中市内田二五〇（豊中五六三）	京阪神急行車輌部第一技術課技術課長
五歩一純郎	〃15	西宮市鳴尾町平田四八	東芝KK機器技術課
西堀清美	電15		福島市労働基準監督所
盛岡英治郎	機16		門司市国鉄監理局機械課長
池田泰雄	治16	東京都杉並区成宗三，四九四	興亜石油KK製油課長
野崎善藏	〃16	山口県岩国市	神戸工業大久保工場
砂越竹夫	化16	兵庫県加古郡加古川町溝之口二二，三七五	大阪中央放送局堺放送所
奥村正己	〃16	大阪市阿倍野区晴明通一，七九（天下茶屋五七七六）	乾金属
佐野利正	電16	豊中市岡町	阪大工学部応化助教授
大島直義	船16	布施市長堂三丁目二二	松戸市五番六奥自衛隊需品学校燃料教官
乾晶弘	化17	大阪市住吉区田辺東之町六，一七	川崎製鉄計量器工場
京極与寿郎	〃17		
松本裕太郎	〃17	千葉県市川市八幡町四丁目一三。四	
斎水静男	化18	神戸市長田区苅池町六，七三一三	
岡三太郎	精19		
村田良二郎	電20		

田中行雄	精21	大阪府堺屋川市字香里　千歳荘	大阪市大理工学部技術
久保三郎	技27	大阪市南北桃谷町一八（南七九。）	住友金属
四宮誠裕	船28	〃　阿倍野区相生通三丁目一五（天王茶屋二九五六）	

現役

岡田博司		吹田市千里山一八九	経済学部四年
村瀬泰弘		西宮市松籟荘二一三	工学部応用化学科四年
四方大中		大阪市阿倍野区阪南町西三、五九	法学部四年
寺田満州朗		吹田市亜水二八五	経済学部四年
山田良平		大阪市阿倍野区王寺町三丁目三（66三一六六）	医学部専門課程一年
飯田総		大東市北条建ノ辺	〃　〃　一年
樋下重彦		大阪府枚岡市上六万寺出雲井七七	工学部通信科四年
大井孝和		大阪府豊能郡箕面町百楽荘三二一七	〃　構築科三年
森川和子		池田市満寿美町五三。	薬学部四年
一山幸代		豊中市下寺内一九一八	文学部四年
乾正		大阪府南河内郡南大阪町整里	医学部専門課程一年

昭和三十一年度新入部員

浅辺信一郎	豊中市本町五丁目七	薬学部三年
森川敬三	尼崎市潮江荒木一五ノ四（48七九八九）	理学部三年
田中弘道	堺市南市村町五七八、三次方	工学部三年
野田憲一郎	吹田市城前町一四〇六次（38二四二九　森田）	経済学部二年
兼清喜雄	奈良県北葛城郡高田町大字新庄字宮前三八	工学部二年
山本信樹	芦屋市三条南町四五（芦屋二〇一九）	工学部二年

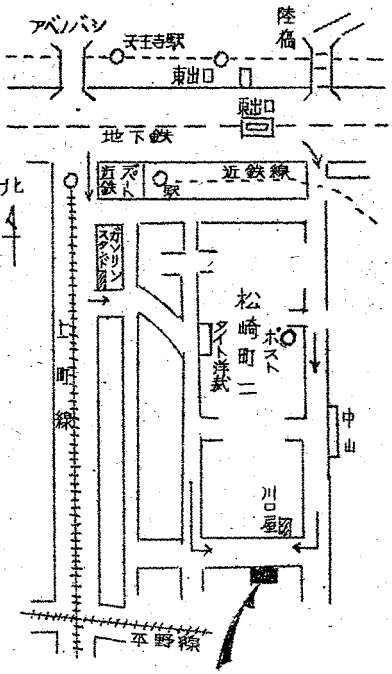
昭和三十二年度新入部員

大島告	尼崎市西大島稻葉荘二、五〇	工学部一年
米林外茂男	宝塚市日ノ岳一二（宝塚二三二）	〃　二年
三宮春久	東住吉区田辺本町七、一四	経済学部一年
木村征二	神戸市東灘区御影町石屋三六〇ノ三	工学部二年
玉井康雄	西宮市伏原町九、二　三〇六号	理学部一年
笠松卓爾	西宮市甲子園口二丁目三四七	医学部教養課程一年
佐藤茂	尾崎市東富松車塚二三二	文学部一年
田村敏秀	北区曽根崎上二、二六	医学部教養課程一年
田井英男	尼崎市園和一一、九	工学部一年
平田彰	長崎市香焼町	経済学部二年
森村弘子	奈良県吉野郡上市町	医学部教養課程一年
上床春美	東京都豊島区池袋二、一六九二	理学部一年
徳山卓夫	池田市北畠本町一三森村昭二方	医学部専門課程一年
梶山孫男	神戸市兵庫区大開通七、六	〃　教養課程一年
前田安昭	大阪市阿倍野区昭和町西一丁目二七	理学部二年
横尾由松	池田市姫里町二丁目九六一	〃　二年
小野公平	阪大北島寮	医学部教養課程二年
今井総	阪大北島寮　群馬県甘楽郡新屋村金井	工学部二年
公瀬貞雄	南河内郡白鬚荘町初芝駅前	〃　一年
牛畑敏一	兵庫県三木市志染町安福田	理学部二年
村井忠雄	玉子町三北島寮	工学部一年
野瀬武彦	北区中崎町四八	経済学部一年
大工原恭	北島寮　和歌山県那賀郡貴志川町前田	歯学部教養課程一年
黒田祠郎	東淀川区三国本町三一	工学部一年
	西宮市若松町二八	
	尼崎市北竹谷町二、一〇七	
	北島寮、兵庫県朝木郡朝不町山内	

大正九年より伝統のある

吉田屋の山靴

スキー靴

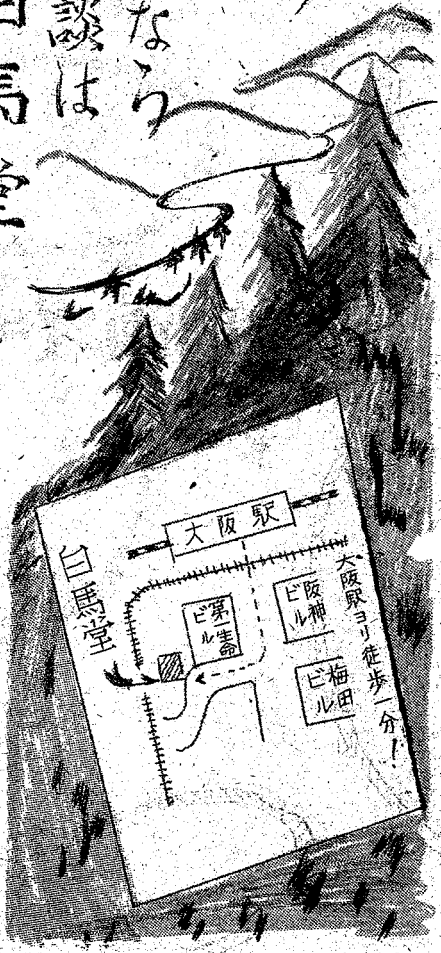


吉田屋株式会社

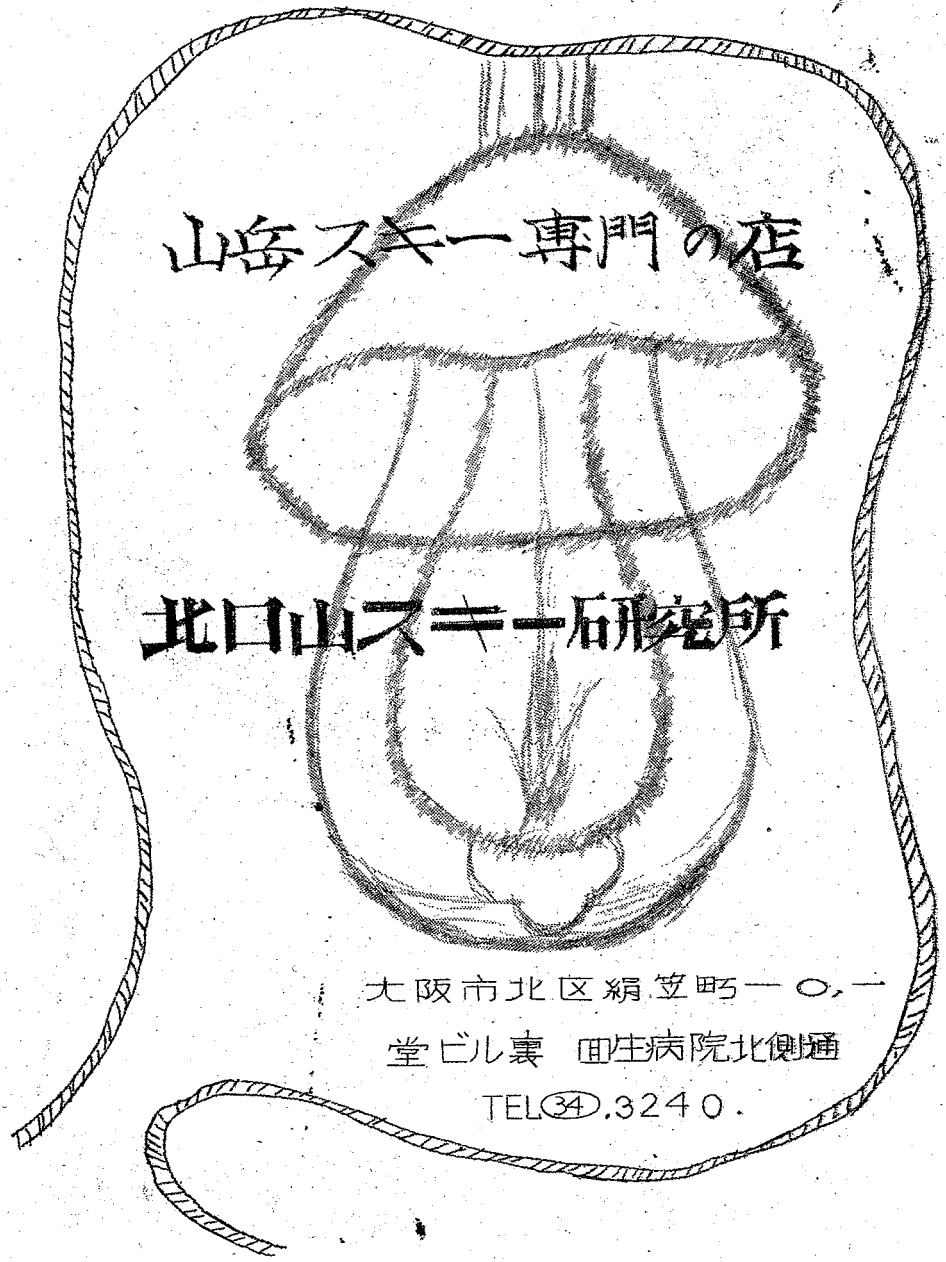
大阪市阿倍野区松崎町三丁目三八番地

電話 天王寺 ㊼ 九五四一番

スキーの事なら
山の事なら
まず相談は
白馬堂



東京山友社たかはし　登山靴
スキー靴
関西総代理店
登山・スキー用品専門
白馬堂
友田彦士
大阪駅前第一生命ビル南口隣
TEL ㉞〇四八四四六六四五番


山岳スキー専門の店
北口山スキー研究所
大阪市北区絹笠町一〇,一
堂ビル裏 国生病院北側通
TEL㊹.3240.

登山スキー用具専門店

西沢スキー・金田スキー
直井スキー　その他舶来スキー

#8100
ビニロンテント・ビニロンヤッケ
オーバズボン・オーバシューズ
内田ピッケル・アイゼン
以上の品大量に入荷致しました
ぜひ，一度お立寄り下さい

山の店

大阪市北区曽根崎上一ノ二四
TEL ㉞ 4192

あなたの上達を保証する
ラ君・スキー
1958
ベルグ印
R.K.Mizuno
本店 ---- 大阪淀屋橋
東京支店 ---- 神田小川町
美津濃